東京天使

猫離脱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東京天使

【Ｎコード】
Ｎ５７０６Ｃ

【作者名】
猫離脱

【あらすじ】
東京にきましたよ。あの東京に、アジアのいや世界の東京。東の都。ドラゴンボールじゃありません。

（東京天使）に会ってきた。
「人は人に夢見せるために生きてるの」
こんな言葉、音にできるなんて。アメリカ映画の影響か東京はいまだ戦時復興ブームだ。ぼくらはいい教育を受けた。東京天使ハルはぼくに夢、見セル。世界人口何十億、東京人口いかほどか。何千万の口の内ハルの口は特別だ。口だけでぼくをいかしてくれた。
「口だけの男は最低よ」
ぼくは「ああ、そうだ」といいながら天使の中に入っていった。
今日という日がハルの夢なのだろうか。大きな夢は多くの人を取り込む。ぼくはハル一人の夢にとりあえず取り込まれる。世界何十億、東京何千万の夢の内これは良い方の夢だ。ハルの夢が世界を取り囲んだら、ハルが眠り続けていられたら、それを知っているぼく以外の人は幸せになるだろう。ぼくはそこまでハルを愛せない。夢ミセられない。
ハルはぼくを監禁して餌を与えて、はたして我が輩は、ぼくは猫であるなんてオチで物語は完結するはずはなかった。この夢は覚める気配もない。

ぼくは力を集めていた。物をつくる力がぼくに集まった。ぼくは結果を出していた。物をしっかりとした形にしていたからだ。何百人とぼくを知っている者はなかった。ぼくだけがそれを知っていた。ぼくは物を形にできていた。力が宿った。ぼくに任せるらしかった。力を授けられたうえ仕事を請け負った。千や万のたぐいではなかった。ぼくにはまだそれだけの夢を処理はできなかった。百単位にも及ばない。ぼくにとって百は終わりを意味する。ぼくの単位は一から百まで。理解できる単位。管理できる数字。いまの所はこんな感じだ。欲張らなくていいところはこういうところだ。

直接的に一対一で受ける影響がよいものだとしてもそれがまったく別の所に間接的に感染して多くの人に悪影響を及ぼす。だからといって自分の愛すべき人を犠牲にしてまで感染の余波を懸念するものなどいるのかいないのか。

立場を明確にしなければならないなら、ぼくは前者だ。感染させてやる。汚染の源流になってやる。だれか対策を講じるだろう。仕事が増える。景気対策。需要と供給。かつてのぼくのように働け。疲れ切り、吸い取られろ。はいつくばり、こらえろ。真面目にやってりゃ、やがて光さすだろう。

福島に本当の空があるのかは知らない。東京の空は快晴で、すっきり薄く青にしみ出していた。天気はぼくのふとんカバーの色に使いたいくらいで、5月で17日で日曜日だった。今日に限っていえば問題になる数字も色も曜日もなかった。ぼくはいつももう一段階も二段階もこの空は高く深くなれるんではと思っていた。空って言う奴、見る者によって違うのか。見る場所によって違うのか。この科学的な答えを知らないぼくは幸せだった。ぼくは空をぼくの空として感じることができていた。その楽しみは数秒足らずだったがそれ故に贅沢だった。ハルはこの空をしらない。彼女には血みどろにでも見えるのだろうか。それもぼくにはよさげだがそれはただの好奇心だ。空が血の色だなんて。ぼくのおそまつな火星の空のイメージだ。

太陽の出ている間、空の青い間、外にでない女性は多い。なぜって、太陽が嫌いなんだろう。青が嫌いなんだろう。そりゃそうさ。目の前に目に見えるところに完璧なるものがあれば、イヤになっちまう。自分よりすぐれたるものがいればがっくりくる。やる気なんてなくなるさ。だから蛍光灯とかネオンとかテレビやビデオの画面で自分の優位を勝ち取る。じょじょに自信をつける。すべてが明るみになると消えてしまうんだ。理想も自信も。夢から覚めないよう

に。うち負かされないように。ささやかなものを壊そうとするやつらにだまされるな。最後までいけ。太陽から身を守る皮膚を空の青さに染まらない自分のそいつを手にするまで。

お酒は海。そのボトルは船底にある船室の窓。

「楽しいわね」「わたし今、幸せよ」

酔うとケタケタ笑う女ではなかった。ぼくは楽しいとか幸せとか考えてこれだと答えだすことはできなかった。でも彼女のように思うことはできた。

「ああ、俺もそうかもしれない」「楽しくて、幸せだ。」口に出してみた。

「でしょ、わたしたちって気があいそう」

「そんなこと言うなよ」

「そんなことといった時点からあわなくなるもんだよ」

「冗談いってんだろどうせ」

「ふふふ」

「あなた、いいわ、すてき」

ハルは冗談をいったわけではなかった。楽しくなくも不幸せでもないようだった。今はそうだった。

それはよかった。それだけにどっぷりつかりたいようなそれでいてその楽しさと幸せがあまりによくて恐ろしささえ感じた。ぼくはそれに浸かりながら上がることを考えていた。この幸福の代償は何か、頭の中で探っていた。

「何考えてるかあててみよっか？」どきっとした。そういわれただけで当てられた気がした。実際彼女にはわかってんだろう。気が合うのだ。

幸せな場所と時間を移動させなければならないのはなぜだろう。最後にそう思い声にだした。

「これから、どこいく」

「わたしのうち」決定されていたような抑揚のない即答だった。恐

怖は感じなかった。

「俺は思いを証明するために生きている」深刻な冗談だった。ただそれが自分の思いか誰か人の思いかに自信はなかった。

「思いは何となくわかるんだけど証明ってどうすること」

「形にするんだ」

「目に見えるように、触れることができるように」

そして「切り刻んだり、叩きのめせるように」

丸いソファだった。遊園地のコーヒーカップだった。たださすがに廻りはしなかった。ハルは隣にいてくれて触れることができていた。体温を存在を重みを匂いを感じた。腕と腕、骨盤と骨盤がぶつかっていた。ハルは背中合わせになりたがった。ソファが殻になって4ホンの足が中心を支えていた。背筋を伸ばして沈んだお尻から肩までがくっついた。首筋にハルの髪の毛をぞくぞく感じた。頭の後頭部がぶつかった。そこが軸になった。首を廻すだけ廻した。届かなかった。匂いは嗅いだ。首は落ちて膝にのった。

うまく騙してくれ、酔わせてくれ、眠らせてくれ、要求の3箇条世界様。膝からかみてに転がって世界と向き合う。熱い息を吹きかける。あつく。あつく。吹きかける。もうどこへもいけないと思う。ぼくのやることを気にせずにそのままにさせてくれる。ハルはぼくの髪の毛の白いところでも探してるんだろう。ぼくは狭いスペースで呼吸をした。

「あなた、これがしたかったの」

ぼくは答えなかった。

「ほんとはなにがしたいの」

ぼくはジーンズの上からハルの股間にまた息を吹きかけた。ぼくの唇だけが熱かった。

「窒息させてあげよっか」

「はい」ぼくはそう答え目を閉じた。

「ねえ、あなた東京人」
「今日、今日初めて東京に来た人にあったの」
「聞いてる」
「田舎から出てきた人でカズヤ君」
「名前は普通よね、ふくしまって知ってる」
「九州の辺りって聞いたらもっと田舎だって」
「彼笑ってたけど私のこと馬鹿にした風には感じなかったわ」
「で、泊めてくれっていわれたの。いきなり」
「彼、いくあてないんだって」
「なんで東京きたのって聞いたら田舎がイヤだったんだって」
「彼女に振られたんでしょって言ったら違うって」
「彼、深刻そうだったわ」
「お金はあるのって聞いたら、あるっていうから少し安心したわ」
「それで、私これからいくとこあるからなんていって置いて来ちゃった」
「あらてのナンパにしては深刻だったし電話番ゴーとかも聞かれなかったし。ねー、なんで東京なのかな、私、このまえ友達と旅行で山形の温泉いったけど町の方とかそんなに東京と変わってる感じはしなかったけど山形ってふくしまより都会だからなのかなー」
「田舎ってものすごいところなのかなー」
「ねー」
「聞いてる」

天使をとらなければいけない。噂を聞きつけ男は東京へ向かった。それだけの理由だった。
東の都。世界の果て。この匂いがたまらない。みずから機能している奴なんてほんの一握り。この巨大な流れに乗るのは気持ちいい。闘志が湧く。この流れを太くしているのが昨日のカズヤ君だったりする。また一人飲み込まれた。ぼくの知る限りでまたひとり、だから謙虚に見積もって十人。一日十人で年３，６００人。行方不明。

また深みを増した。流れが急になる。ちょっとばかしの勢いだがゴミを排除。また穏やかに。鎮まった。

「そんなのはじめだけ。気づかない内に吸い取られるの、なにもかも」

「これまで何人も見てきたわ」

「期待をさせて、させるだけさせといて裏切られて」

「まあ、その人からすれば裏切られたのは自分だっていいたいのだろうけど」

「あなたの最後がみたいわ」

「あなたはどんな風に言うのかしら」

「どんな無口な人でも最期のセリフをいうの、私はそれを集めて商売をしてる」

「俺はもうこれが最後だよ」

「もう終わってるよ」

「終わってここへきたんだ」

「あなたは夢みてないの」

「眠りはするよ。特にしょっちゅう。夢も人よりみると思う」

「あなたは東京にいるのよ」

「俺にはもう出すものなんてないんだ」

「手品もできない」

「トリックも見破られるものばかりさ、肝心要の武器がない」

「これでいいか。俺の最後のセリフ」

「武器がない」

「戦う武器がない」

「武器を持たずに戦場へ来て立っている」

ぼくは見つめられていた。悪い気はしない。いい女だまったく。

「今度は違う表現のを用意して置くからまたにしてくれ」
「じゃあ」
「また」

ぼくはどこに泊められているわけでもなく横向きになり目線があったタバコをつかんだ。嬉しく思いつかんだ箱は空だった。
「俺は世界とたったひとりで戦ってその記録を残すんだ」
ぼくも最後のセリフを一つばかし持っていた。それはぼくのではなく。死んだ弟のものだった。

「くそ」
「勝てるかよ」
荒けてみたけどどうもこうもない。

「助けてくれ」
「くそ」
どうもこうもない。

弟が死んだ。
自殺だった。
ぼくは弟のために戦おうとおもうのだが弟に力、求メル。
弟の残したノートをハルが持っていった。
ぼくは弟の集めた吸い殻を集めゴミ箱にいれた。
一本一本。丁寧に灰皿から捨てるための吸い殻入れへ。
ハルはノートを譲り受けた。
「これ本当に貰っていいの」
「ああいいよ」
そのかわりぼくは弟の最後の言葉はハルにつかませなかった。
「兄貴、俺は世界と戦ってその記録を残すんだ」

りっぱだよ、お前。そして死ぬなんて。度胸アルよ。
「くそ」
お前の変わりに死んで欲しい人間はたくさんいるのに。お前は何を見たんだ。何を一人でつかもうとしたんだ。
きっとこの世をこねくり回して複雑にしようとしている奴にあったんだ。そうだろう。
「くそ」
「おい」
きいてるのか。
起きてこい。もう一回やり直すんだ。
俺を助けろ。お前の敵を討ってやる。
弟のノートに書かれていたこと、ぼくはそれを読まないはずはなかった。よまないで人にくれてやるはずはない。
ハルにくれてやったのには意味がある。お前が東京に来て真っ先にハルに会っていれば。
お前にハルを会わせたかったんだ。今はノートのお前だけど。
俺の東京天使をさ。お前に見せてやるよ、だからお前、見るんだ。
お前の望みとはちーッと違うかもな。でも許せよ。死んだお前が悪いんだ。
わかってんだろう。

ぼくは弟の部屋を片づけていてがっくりした。遺書みたいにノートを残しやがって。お前なにをそんなに無念なんだ。弟が死ぬに当たってそれを捨てておくことぐらい気の回らない奴だなんて思わない。それくらいせっぱ詰まってしまうのか、死ぬことを決めた人間ってものは。恥知らずめ。お前の恥は俺とハルがかたずけたから安心しろ。

俺だってもそうさよ。期待や希望を毎日むしり取って生きてんだ。自分できずかない奴だって人にむしられてんのよ。きっと。

時間よ止まれ。

ハル今すぐお前に電話したい。でもできない。そうこうしているうちに奴がやってくる。朝だ。新しい朝だ。

「くそ」

「止まんねえ」

ハル

お前を抱きたい。

いや、嘘だ。

ハル

お前に抱かれたい。

「くそ」

ハル

お前の胸で涙、流したい。

お前を思って。弟を思って、俺の明日を思って。

未来が憎いんだ。それじゃあ駄目だってわかってんよ、でも今を耐えられない。そう思わずにはいらんねえ。

誰かが欠片欠片でいいから助けてくれと祈る。

今日はあいつ、この瞬間はあの子。

助けてくれ。

そうしてお前は死んだのか。

誰にも連絡できずに。

助けて欲しい人がこの世に存在しながら。遠慮したのか。あきらめたのか。誰もがそうだと思ったのか。

なんなんだろうな。つまはじきだよ。おはじきってしってるか。

指先ではじくんだよ。

指先で。けっこう遠くまではじくもんさ。俺もお前も遠くへきちまった。誰がはじいたんだろうな。俺にも会いたい奴はいるよ。たった今、このときだけ。一秒でも何秒でもいいさ。電話番号はしって

んだ。なんで電話もできねえって。なんでだろうな。気をつかってんのかもな。人妻だし。夜、遅いし。ただ声聞くだけでもだめか。だめなんだろう。かけられないってことは。そうなんだろう。すべてが自分のためにつくられてんだって思いたいね。どこをどう酔っぱらってもそう思えない。お前とはやっぱり兄弟だよ。代わりも見つけられないんだろう。その電話をかける相手の代わりも。よーくものが見えすぎているのさ。違いがわかるのさ。そーだよ。すべてが欠片欠片全力で自分を助けてくれたらと思う。全力で。

その瞬間をたすけてクレル。

お前は全部一度捨ててしまった。

お前だってかける電話番号くらいいくつかもってたんだろう。それを使うとつかわまいとにかかわらず。お前は全部捨てたんだ。これ以上悩みたくはなかったんだろう。使えない自分の弱さがいやだったんだろう。

深入りしすぎたよ。これからハルを呼んでも立ちやしない。今夜はお前とふたりっきり。心中だ。朝まで。俺とお前が憎しみ憎んだ、人々がうごめきだす、朝まで。

連中に活力を与えるな、朝。起こすんじゃない、朝。

「くそ」

俺らだけが起きてくればいいんだ。人々は眠ってろ。朝。

こんなに愛してるに俺に俺だけに愛を。

全部裏切りさ。俺もお前も。自己完結できるんだ。それが唯一の特性。人なんか必要ない。目線にはいればそれでいい。テレビでもみてるようなもんさ。そうだろう。

だから死んだんだろう。

ぼくはかなり酔って深く沈んだつもりだったが、窓の外にはネオンが輝き、夜はまだこれからのようで、外へでるとこんなぼくでもいつでもまだ迎えてくれそうに思えるのだった。
ぼくの夜は朝に比べてまだ浅かった。
おはじきったって爪がわれんの痛がってちゃあどうもこうもねえ。

「人生なんて部屋の配置を変えているようなもんよ」
弟の部屋に移り住むことにしたぼくはハルにありとあらゆるできうる限りの配置を逆さにされて部屋の中央に置かれていた。簡単に考えるとこの部屋でぼくは自殺と正反対の向きの人生に向かわされようとしていた。

一ヶ月かかった。朝、昼、晩を問わずハルはこれるときに来た。そのたびに「次、私が来るまで部屋の中のものになんにも触れちゃ駄目よ」とぼくに言い残した。
ぼくはぼくの人生に触れることすらできないでいた。ティシュペーパーの位置やゴミ箱を数センチ動かしても狭い部屋では致命的なミスになるらしく、その都度注意された。

ぼくの人生は東京天使御用達だった。その部屋ができるまでの、何にも触れられづ、変えられない辛い一ヶ月をハルは「あなたのこれまでの人生そのもの」と評した。ぼくはその一ヶ月で一回だけハルに聞いた。「タイムマシンで過去にいった人が過去を変えてはならないのは本当か？」
「そうよ」と、答えた。

ぼくの人生は一ヶ月で完成した。真っ昼間で始まりだった。
「いい。すごくいい」
ハルは満足していた。息をきらせて滅多にかかない汗をかいていた。ほおが自然に上気して赤みを増した。ぼくがやりたいだけやらせた

からだった。ぼくはこれまでのすべてをさらしたがハルもぼくに見せるものを見せていた。この部屋は東京天使のお風呂なんだろう。ホントにそれでもかまわないと思った。ぼくはハルにちょこっとだけ夢ミセていた。

だけどそこはぼくの居心地にはあまりそぐわなかった。ハルが、どう？とぼくに意見をもとめないのは幸いだった。しかしいずれ場が人をつくるというのかどうか、たしかそんな言葉があったはずだ。それだ。いまは。

勇気がお金になるのなら俺みたいな弱虫は今頃大金もちさ。

疲れさせて眠くさせるんだ。どこへもいけないように。

ぼくは頭の中のノートを開き、弟の作り上げていた部屋を思い出そうとしていた。

ぼくは目を閉じた。ハルの匂いが襲ってきた。東京天使に隙はなかった。

例えばむちゃくちゃ好きな女がいて、やらせてくれる。そのかわり死ぬところみせてっていわれたらどうするかってことをぼくは最近見つけた穏やかな公園で邪魔者だったがそんな事を考えていた。勝つ場所はみな抑えられている。持てる人間が持てるだけ背負わされる時代。明日を誰が動かしているんだ。胸やけさせながら詰め込めるだけ詰め込む。誰が望んで動かしているんだ。明日に振られている奴はどうしたらいい。朝に起きて、決まって三度の飯を食う。しなければならないとだれかがいっている声が多すぎる。

ぼくはうつぶせになり布団に倒れ込み息を切らせ白いさらにのった白い唾を舌先で触れシロッとすくい上げ飲み込んだ。初めてのそれは塩っ辛かった。あとになって海の水と同じだと感じた。何度もうがいをして舌を洗ったが数時間海の味は続いた。どうも海海ってみんなが簡単に言うほどいいもんじゃないな。ぼくはそれにより海がそんなに好きでなくなりかけていた。なんであいつは青い色して

んだろう。遠くからあんな綺麗にみせといて。なめるとこれだ。塩っ辛い。ぼくはぼくの白い唾を瓶に溜めていつそれが青くなるんだろうと試してみたい気がしないでもなかった。

「ウスバカゲロウとうすら馬鹿げろ。って似てない。あたし発見しちゃった。あのさ、クイズの番組だったの。それでね。答えがウスバカゲロウ。答えって画面の下の方に字幕ででるじゃん。ウスバカゲロウ、うすばかげろう。あたしねそれなにかしらなかったのよ。頭ン中で繰り返している内に声に出ちゃって、うすばかげろう。繰り返してるとさ、うすらばか！げろ！ってなるのよ。テレビでは真剣なのよその答える人も司会者も、真面目で息が詰まるって言うかそういう風を演出してるのね。で、それなのに私はうすらばか。げろ。でしょ。笑っちゃって。ねえ。あなた知ってた。うすらばか。げろ。を。ふふふふふ」

ぼくは知らなかった。ぼくは知らない言葉をきくと辞書で調べるのだ。新しい言葉を聞くとこの年になるとうれしくなるものだ。薄羽の蜻蛉はうすら馬鹿げろ科の昆虫でトンボに似ているとの事だった。幼虫はありじごく。とのことだった。

「おおーあいつか」ぼくは幼い頃幼虫のそいつと良く一緒に遊んだのを思い出した。やっぱりいい奴だったんだ。大人になったお前は大人になった俺とついにまた巡り会ったってわけだ。辞書の中のそいつはその言葉は光り輝いてみえた。呼ばれはともかくだ。ぼくはうすばかげろうをその晩認めた。ぼくに向けられてぼくが聞いた声はハルからの留守番電話でぼくが発した今日、唯一の声が辞書の中に吸い込まれた。ぼくは今日ハルから影響を受け辞書から新しさと過去の風景を得た。それが一日の収穫だった。ここ数週間を振り返って一番の出来だった。

あたまいてーけど昨日の続きするしかないな。これをピンポン頭痛と名付けよう。ぼくは調子にのって新しい言葉を日々探し続けて

いた。ぼくはそれを使用するのにハルでそれを試していた。言葉をぶつける実験台だった。ぼくはハルと電波の中でしか会っていなかった。飛び交う電波の中で数少ない密度の濃い出会いでありたかった。ぼくは必要以上にそれにすがっていたことを認める。

「例えば自分のことどう思われたい」

ハルにその事を聞いてから返事がなくなった。

失った分はとりもどすぜっ。得ようとしても失い、得たはずが幻滅し失う。ぼくは朝御飯にパンを喰らい、扉を開けた。金に、お金様に支配されてんじゃない。お金を持っている奴に支配されてんだ。子供の頃は親がお金持ちに見えたもんだ。なにせ硬貨一つで満足できたんだから。いまじゃなんだ。どっかでお金様を憎んでいらっしゃるでござるまする。でしょうが、そうではありませんか。ぼくは時代劇風にひとり思い、地面にはいつくばり、自販機の下を荒らし回って稼いだ時代を今ここに再現していた。ぼくの一日の仕事。一日の冒険。百をこなした。軽く。ぼくの目はマジで息は止まっていた。なぜって、ゴミやチリをあやまって吸い込まないように。鼻からふんふんなんてもってのほか。冷静にしとめるんだ。大事な指を傷つけないようにぼくはアクリルの定規をやっとの事で手に入れていた。ここ一番で欲しいものを探すのって難しい。いっけんとるにたらなくて簡単に手に入れられそうなものほどそれを得るのに手間取るもんだ。ぼくの場合はそれがアクリルの定規だった。構想は十秒でも準備に3日かかった。本番ではそういう間にその準備の3日に人様に出し抜かれるんだきっと。ぼくはそれを知っていた。

ぼくは待っていた。ハルを待っていた。ハルの存在を。肉体を。目で見、手で触れられるハルを待っていた。そして望みはそのときに果たされなかった。千二百三十円を手に入れた。

世界とは自分のこころ許すもの以外のすべて。俺には自信はない。あるのは涙ながして生き続けること。愛してるってどういうこと。繋がっているときが愛してるってこと。

時々お前のことが欲しくなる。お前も時々は思うだろう。俺のことが欲しいって思うだろう。きっとお前が思ってるから俺はそう思うんだ。そして俺が思い。それを受けてまたお前が思う。最初に思ったのはどっちだったか。

ぼくは真夜中の部屋の天井を見ながら数ヶ月前に人妻になった女のことを考えていた。部屋の戸をたたく音がしてぼくは電気をつけ戸を開けた。

「あの、森谷、晃さん」といったきりうつむいた。ぼくがそうでなかったからだ。

「はあ」とぼくは答えた。

「晃さんは、いますか」女は顔をあげぼくにしばらく目を見られっぱなしだった。

ぼくは感情を捨て他人事のようなことを他人に向け言った。

「晃さんは死にました」

ぼくは女の目をみていた。女は視線を外さなかったのでぼくのほうから外した。ぼくはいらいらしていたからだった。ぼくは怒りの気持ちをこのか弱そうな女に向けてはいられなかった。

「すみませんでした」

女が振り返っていこうとするのを止めた。

弟の名前をぼくが兄として出してはじめて女はおびえた様子を止めた。家族と決めてこんなにも態度を変えるのは良くないなとぼくは冷静に思った。ぼくはさらに冷静さを増し女を部屋に入れた。ぼくはあいかわらずいらいらしたがこの女を襲ってはならないとは思った。

「えっとお名前は」主導権はぼくが握っていた。狭い部屋でなかな

か座るところさえ見つけられない女に場所を指示してあげながらはてなにをしてもてなそうか考えていた。
「あすかです」だそうです。ぼくはあすかという女に冷たい水をだそうか熱いお茶にしようか烏龍茶にしようかコーヒーにしようかありとあらゆる可能性を探った。ぼくの部屋には流動食というか嗜好品というかまあそれらは全然違うものなのだがそのたぐいがぼくの嗜好として数多く備え付けられていた。
「晃とはどんな関係の人？」唐突に聞いた。ぼくはまだ迷っていた。なかなか女の前に座らなかった。薄手の花柄のお茶碗にお湯に入れた。残りのお湯は沸騰させるためスイッチをいれた。一杯。勝負だ。ぼくは女の前に座った。
「晃が死んだのって知ってました？」
女は「はい」と答えた。
なんでまたじゃあ晃さんいますかなんて訪ねてくるんだと思った。
「あすかさん」
「はい」
「弟の墓って知ってます」
「いえ」
ぼくは弟の墓の場所の詳細を教えた。別紙に絵柄つきの解説書を添えてやると彼女は笑った。ポストはまだしも兎のマークのクリーニング屋を表す兎さんはぼくのねらいどおりの大サービスだった。彼女にそれを眺めさせているうちにぼくのお湯はわいた。ぼくは彼女にお茶を出した。いい色だった。味は薄味。口触りと色、香りを楽しんで欲しい。ぼくが先に口を付け、
「泣きました？」と聞いた。
彼女は茶碗から顔をあげぼくをみた。
ぼくはなにを自分でいってるんだろうと思った。
「晃、死んで泣きました？」ぼくはづけづけとものを言った。
「自殺って聞いてるでしょ？」ぼくは何をだれに責めてるんだろうと思った。

ぼくは茶碗を置いた。女の反応を見た。
何か答えなければいけない状況をぼくはつくりだしていた。らしくなかった。
「晃君とは」女は話し出した。
ぼくは黙って聞いていた。良くしゃべった。女はみなこうなのか。
話し終わるとはにかみながら
「あっ、いただきますね」といい茶椀に口をつけた。
恐ろしいと思いながらそれをみていた。
ぼくは怖さからそれを破壊しようとはしなかった。
また茶をすすった。
見ていた。
「似てる」といい女は笑った。
ぼくはすこしたじろいだ。彼女主導の流れになりつつあった。
しかし彼女の声を聞く内にそれも悪くはないだろうという気になった。
「部屋の中だいぶ変わりましたね？」
「ああ、これ、うん、そう」ぼくはかろうじてそう答えた。
ハルのつくった部屋で弟との思いでの詰まった部屋でぼくは今現在ここの住人なのだがぼくの味方は目の前の茶碗と薄緑の中身だけのように感じた。ぼくはなぜここにいるのか、いてはいけないもののように感じた。ぼくはぼくの時代の渦に巻き込まれそうになったがかろうじて目の前の客人を捉え踏みとどまった。
「今日びっくりしたでしょう、戸ー開けて晃出てくるとおもった？」
「とってもびっくりしました」
「近くまで来て、部屋の明かりがついてて表札も変わってないし」
「わたしなにやってんだろうってノックしながら思っちゃって」
「で、でてきたのが怖いお兄さん」
「文字通りお兄さんだったわけだけど晃から聞いてなかった？」
「聞いてました怖いお兄さんだって」ふふふっと笑い、ぼくも笑った。

「兄貴はこっちいないんだ、兄貴こっちの人間なのにっていってました」
「残念がってましたよ。兄貴はどこでも通用する。兄貴を尊敬してるって言ってました」
こっちの人間。俺を尊敬。
「なんか照れるね」
「そんなに見られると」笑ってごまかしたふりをした。
どーでもよかった。ぼくは確かにどこでも変わらないだろう。弟の言うとおり、田舎にいようが東京にでてこようが対して意識しない。田舎と東京の区別ができていないだけだ。弟と違ってしゃべりもうまくないしわかろうとしない。変わろうとしない。どーでもいいんだ。ぼくの精神はそれにつきる。しかし最近はいろいろ考えるようになった。弟が死んで、こっちへ来て、ハルと会って。東京には考えなければならないことがあるんだろう。この部屋には区別しなければいけない色があるんだろう。そう思い始めていた。
「また、来てもいいですか」
「え」
「ここにまた来てもいいですか」
「ん」
「ああ」
「はい」
ぼくは言った。
「あたしの名前覚えてます？」
「あすか」ぼくはぼそりといった。
「あたし、ハセガワ　アスカと申します」
「またきますのでよろしくお願いしますね」
「おじゃまでなかったら」
のぞき込まれるようにされてぼくは
「ええ、また」と言った。
ぼくは話を聞いていなかったかのように立ち上がり帰ろうとする彼

女をまた呼び止め唐突に「長い谷の川で明日の香りですか？」と聞いた。
くるっと振り返って指で胸を刺された。
「正解」
ぺこりと頭をさげ別れた。
ぼくは彼女を送りもせず。戸を閉め、ひとり部屋に残り茶碗を片づけた。ぼくが置き去りの二つの茶碗になにも感慨を見いだそうともしないのはぼくがどこでも通用すると言った弟の見解の是を意味するのだろうかと思った。
ぼくは人を嫌っていた。突発的についさっきまで人と仲良さげにしゃべっていてもいきなり口をつぐみ不機嫌そうな顔してるといわれた。それは人と話す言葉がそれほどなかったからでもあった。語ることなども感銘をうけたことなども人に触れる前に自分で消化してしまっていた。ごくりと飲み込んでそれを吐き出すと汚いのだ。それは誰もがわかっているはずではないか。人の話を聞いているとつくづくそう思った。地元の工場には六年勤めた。代わり映えのしない会話や挨拶が気づくと何度も続いた。だれかがぶちこわしてくれるのをだれかが望んでいた。ぼくは眠りっぱなしだった。生きている価値についてはないも同然だった。弟が死ぬことは唯一の肉親が死ぬことでもあった。会社をやめた。ちょっとした羨望のまなざしがあった。最後の仕事を終え工場からでると朝日は弱々しくも光をそこいらじゅうに刺していた。ぼくは息を吸い吐いた。深呼吸などできなかった。ただ息を吸い吐いた。なにも決めることなどなかった。決意の朝とかいわれるものなどなかった。しばらく地元でふらふら過ごし。適当な準備をして東京へやってきた。だけだった。なにかをやるつもりでもなにかが終わったわけでもなかった。
「兄貴は紳士そうにみえて確かに紳士だけど時々おっかないことを平気でする」
「なにが」と言ったがあれが弟を狂わせた原因だとは思わない。

昔、女と部屋で飯を喰っていた。女とは外食とかはほとんどしなかった。部屋に入り浸りだった。女が帰り、ぼくが夜の後かたづけをしているときだ。それを弟が見ていた。
「お前も喰うか」とぼくはいった。
そのときぼくの定番は坦々麺と称してカップ麺に挽き割りの納豆をのせて食べるというものだった。ぼくは汗をたらしながらむさ苦しい部屋で女とそれを喰っていたが弟にはそれが驚きだった。らしい。
「兄貴人にどう思われるかって考えねえのか」
「ん」
たしかにあの後あのカップ麺のあとその女からの連絡はなかったかもしれない。ぼくもとらなかった。あの飯が原因だ。と弟にいわれたが確かに後からすればそうとも言えた。あれは女の子に勧めるもんじゃあない。それからしばらくそのカップ麺と納豆の組み合わせの食事をぼくは女と同じように忘れていた。弟が笑って「あれはうまい。」「やってみたけどさいこーだった」そういうまで。

弟は女にもてた。ぼくの場合はまあまあもてたというくらい。場があって男の数と同じくらいの女がそこにいれば、真面目に暮らしているぼくとしてはひとりぐらいぼくに気があるような女がいるようになっていた。弟はぼくを尊敬し憧れている風をいうがぼくにしてみて弟はいい男だった。みていて輝きがあった。ぼくは常にその対極に位置しているのを感じていた。弟は良く笑い、話し、人を可笑しくさせた。ぼくすらその恩恵に預かった。ぼくは弟だけは許していた。ぼくのこころ許す数少ない世界だった。
思えばあの当時から明日香という女とつきあっていたのかもしれない。今日、明日香という女が訪ねてきてそう思った。長いな。弟と長いつきあいをしてきた女に違いなかった。ぼくのカンはそう告げていた。
ぼくはグラスに水を注ぎちびちびやっていた。もうすこしで明日香という弟のなじみに変なことするところだった。晃にまた笑われる

な。おれの女に水出すなんて。レストランじゃねえんだぜ。兄貴かんべんだぜ。ってなところか。ぼくは水に凝っていた。ぼくの今のはやりで弟を訪ねてきた女を追い返すわけにはいかなかった。ぼくはひとりでしばらく水を楽しんだ後、眠りについた。一週間寝かせた水は良い夢を見せる。ぼくは明日香がそれをわかってくれそうな気はしていたが弟のためにそれをやめた。フランスとアメリカの水を半々でわけてブレンドし冷蔵庫にいれ寝た。

ぼくはなんで生きているのか。巷で流れる歌謡曲に涙を流す。何に味方するわけでもない。自分に味方してんだ。内なるものの重さを抱いて深き海の底。熱くなり叫べばいいのか。冷静に分析し計画通り事を運べばいいのか。それは違う。嘘をつくな。

ぼくは落ちている一円玉を見逃さない。人混みで息をするだけでいい。誰かの視線にはいるだけでいい。自分の声を聞かせるだけでも。存在に価値があり金が支払われるべきだ。支払うのはだれか、ぼくは落ちている一円玉を拾う。生きて人間生活をおくること。社会生活を営むこと。それらすべてにたいしてそれだけでお金が支払われるべき。ぼくはその一円の一グラムに何の価値を見いだすのか。ぼくはこいつを削って粉にして向き合う誰かのコーヒーにそれをいれしかめっ面をさせればいいのか。ぼくは今日ぼくの存在に対して一円を得た。確かに得た。一円の価値の一日はこれで八回目くらいだった。

ぼくはそれにこりなかった。ぼくは8円だった。

ぼくは地下鉄の六十数キロの重石であり頭数のいちにんであり切符をもつものであった。歌い手はアコギを横たえみなが知ってる歌を歌っていた。彼は人の足を見ていた。交差する足足足。彼は歌い続けそしてどこかにいなくなった。ぼくが彼のケースに切符をぶんなげたからだろうか。切符が暗示するものはここから去れということだろうか。ぼくにはなにも考えつかなかった。ただ通り過ぎる足

やちょっと聞いてコインを投げる音。ぼくはそこに切符を入れてやった。彼にとっては一日一番の収穫ではなかったか。そうおもう。切符をあげたのだ。切符を。本来のそれが持つ意味を知る者にとってはけっこうなものだ。切符は。ぼくは方向感覚を失わず路頭をさまよいだれかに追われているわけでもなしに精算機の前にたち出口を複雑にしていた。

弟が死んだことを考えた。それはぼくがなぜ生きているかに繋がった。弟が死んで何も変わらないとは嘘だった。ぼくは田舎の工場をで東京にやってきた。ぼくは弟の東京での頭数の穴を埋めるために使わされた敬虔なる死者、いや使者のひとりなのだ。ぼくが工場をでることになって工場に入る奴がいる。穴が埋まる。ぼくが出会ったハル。ハルにとってのぼく。そして弟の女だったろう明日香。ぼくがよくいくスーパーの店員。ぼくが拾い上げる一円玉。通した切符。地下鉄が血管みたいなもんなら中の人は赤血球に白血球。人間の体の中に人間がいてその各器官ごとの状況をおもしろ可笑しくコントのように演じた映画があった。それがこの世界の真実でないとだれが言い切れるだろう。

ぼくらは世界という神の器官の一部を構成しているに過ぎない。地球という星の呼吸の一瞬を生きているに違いない。ぼくら人間なんかはスプレーで撃退される蠅や蚊のたぐいだ。きっと。その人間より大きなものにとっては。大が小を支配している。だがまれにその支配から逃れる小の中でももっとも小さな小が大を喰らう。ぼくは流れに乗らない小の小で病原体で柱を食いつぶすシロアリを目指した。すくなくともこの町でこの東京でぼくは大なる者の中枢へたどり着き柱を前にしていた。前をうろうろするだけで数年を要した。

その数年の内にわかったことはつるはしの使い方でも爆弾の製造工程でもなかった。柱の前をうろついて、死んだ弟がぼくの前にハルを知っていたということ。そして明日香とぼくはいい仲になった

ということだった。どちらが最初かといえば後者が最初の数年の数をしめていた。明日香は毎週一回木曜日にぼくのアパートを訪れた。世話焼き女房のようでぼくが遠慮したり弟の女であったことを意識すると「ごめんなさい」と明日香のほうからそれを察し行き過ぎたことをあやまるのだった。ぼくは好きにさせていた。ぼくに身寄りはなかった。話をするものも少なかった。ぼくは定職につくことを考えていなかった。ぼくは有るお金を丁寧につかった。本当にほんとのほんとに望むべきものを考えて考え抜くとこの世の商品の九割はまがいものだった。けれども不純物が混じっているからこそ味がありおもしろい。ぼくは純粋なアルコールだけを集め節制し日々の頭痛を手に入れた。明日香が不純物だとはいわない。持ってくるものはそうだったがそれはぼくを思ってだ。ぼくは明日香の木曜日の情に生かされていた。さらにぼくは木曜日だけでなく一週間を一ヶ月を明日香によって生かされているのだと愕然として気づいていた。いつの間にもくそもあったもんじゃない。おそろしい。しらずしらずの内にぼくは柱の前から遠ざけられていた。流れの中央に押し込まれていた。ハルは二週に一遍土曜日か日曜日ぼくのところを訪れたが「彼女できたの」「ふーーん」といい。「じゃあここにはあまりこれないわね」といい。ぼくはなにもいわなかった。ハルとはよく外で会うようになった。だから何曜日とかいつとかでなく。昼。とか夜とか、そういった風にハルを覚えるようになった。部屋では明日香。部屋の外はハルによって世界はつくられていた。夢みせられていた。

「このまえは昼だっけ」

「ごめんねいそがしかった」

「あなた以外はみな仕事してるもの」

「それにしてもあのときあなたひどかったわあのお弁当最後のふたつ買い占めて」

「走ってきたあの若いスーツ君買いそびれっちゃって」

「でもおいしかったわ」

「あなたどうしてもゆずらなくて」
「おかしかったわ」
「あのお弁当」
「あなたのおごりだったし」
「ねえあの公園でこの前事件有ったんだって」
「焼死体のふくろずめ」
「あと一週間ちがいでご対面よ」
「カラスとお弁当の包み一緒に開けるのはいかが、なんてね」
「残念ね」
「あそこでお昼のにお弁当食べるの楽しかったのにね」
ぼくはそういう情報などはしらなかったが、みながしらないだけでそこらかしこなにかかしらの事件の後や残骸がうまくおおいかくされてんではないだろうかとこの長いか短いか誰の歴史か何の軌跡かわからない時間の間に起こったことありとあらるるもんがいったいどこに消えて処理されているんだろうと思ってやめた。
「ねえねえこの前の終わってしまった物屋、あれからいってみた？」

自殺する勇気もねえ。
「あ、いや、まだ」
　実は一回二回いや三回は来ていた。一回目に晃のノートを買った。千二百円だった。ぼくは手持ちの有り金を全部出してまだ足りなくて、あきらめた通りの失った駅の横に有る郵便局のＡＴＭで千円ぽっきりをおろして買った。ぼくは店長にすぐ来るからといって手付けの８００円と空の財布を置いて店をダッシュでた。店長は微動だにしなかった。ぼくが千円を持ってきてもこれといった反応をしなかった。ぼくは釣りすら貰わなかった。正確には千八百円を支払った。
二回目に「夏の思いで」という粘土細工に目をひかれた。６００円だった。
３回目、「怒りにまかせた偏食」という題の絵画を買った。数千円

した。
その店にはいつ行っても客はぼくひとりだった。ぼくはそこに月一で通う客になっていた。二回目にいったとき店長が「毎月、中変わるから」とぼそっと言った。ぼくは毎月二十日財布の中を確かめてからその店にいっていた。

ごみだ。なんにもつかめなかった奴なんてごみだ。
終わってしまったもの屋はごみの溜めだ。ハルはなんでこんな場所をしっているのか。
「ここは世間には消して認められない才能の宝庫なの」
「あなたならそれがわかると思って」
「あなたはそのごみの溜の王よ」
ほめているのはわかった。真剣だった。
「じゃあ君は王女で女王だ」
ぼくは言ったが怒った。
ぼくは寂しさを味わった。
ごみ溜の王と言われてそれをほめ言葉ととるのはぼくひとりだろう。
終わってしまった物屋の存在価値とものの確かさをしるのも本当はぼくひとりなのかもしれない。
ぴゅっぴゅするために生きてる俺になにができるというのか。たしかにぼくは憤る。叫ぶ。むくわれなかった思いの主だ。ときどきその白いぴゅっぴゅを確かめる。海じゃねえかまるで。もう海にはいかねえ。はいらねえ。そして寝て、また忘れる。さんざん酒に酔って吐いて二日酔いして辛い思いしてもう飲まねえなんて言ってまた飲んじまう。
同じだった。ぼくはまだたまに確かめる。まだ海の味だ。確認して眠る。
ハルは最初に会ったときと変わらない。最初から変わらない。ぼくはハルという魔女に王として育て上げられているようだった。
晃のノートをなぜ売ったのかそれは聞かなかった。最初からそれを、

そういうものを売って商売をしてると言っていた。なぜ晃のノートを売った店をぼくに教えたのかも聞かなかった。彼女が教えたのはノートを売った店ではなくていい品が揃ってる珍しい店だからだ。ハルはぼくの行動も反応もお見通しだった。

「五月の花壇」と題された晃のノートは今ぼくの部屋にアル。「真昼の月」という名の音楽カセットテープ。「こぼしたワイン」というTシャツに「バグダットの石」ぼくはそれらを消化していった。一ヶ月に一作品。それらを自分の物にしていった。

それらに囲まれてぼくは満足だった。飽きがこなかった。木曜日に明日香がやってきてハルという女を知っているかと聞いた。知っていると答えた。

ぼくの知らぬ間に世界は動いているようだった。

ぼくが部屋で悦に入っているときに地下鉄の坑道でカレーを食べているときに真っ昼間に目を覚ますときに世界は動き重大な決断がくだされその都度その都度の積み重ねが重みと大きさをつくる。ぼくは何もつくらない。虚構も虚妄も。大勢の人の叫びの源流にあるものはなにかぼくも人と一緒に同じ事を叫ぶべきかと考えた。

ハルがもともと晃を知っていて、明日香もハルを知っていて、それを知らなかったぼくはそれを知って、明日香もぼくがハルを知っているのを知って、それからぼくと明日香はつきあいだした。

なにをもってつきあうというのか、明日香はそれを認めることだと言った。つきあっていると言うことを認めること、だそうだ。ぼくは終わりを考えた、認めて認めなくてまた認めて認めなくなったり時に認めてみたりして、ぼくは一日数十回明日香と別れたりつきあったりした。よーするにハルの前で明日香とつきあってることを認めたのが一番。普段に百回も認めるより口に出して好きというよりなにより認めたことになるんだろう。

そんなもんだなんてそのときは思っていた。

木曜日はハルのつくるご飯を食った。ハルそのものを喰った。ぼ

くはいつも思っていた。女の子は金属みたいなもんだ。金属の味だ。だからぼくは腹をふくらませ剣を飲み込まなかった。逆だ。パンクはしなかったが傷口がいつまでたってもふさがらずいつも疲れていた。

ハルと明日香の間でぼくに対する何らかの契約が結ばれたようだった。何を信じて何処へ向かっていけばいいんだ。ぼくは明日香によりはじまる一週間とハルにより終わる一ヶ月を繰り返していた。流されていた。晃のノートを開いても「ああ、すげー」とうなりをあげ五分ともちはしなかった。ぼくは仰向けになりノートを両腕で高いところのあがるところの最大限にまで持ち上げてぶんなげた。昔食べた料理のメニュウだけを持っていて注文してもだれも作れないのだ。注文することじたいおかしな事だ。ぼくはかつてそれを食べ、だした。おいしい物とまずい物の区別はなにか。風俗嬢とそうでない女の違いはなにか。ぼくは目をつぶり眠りながらそれを考えようとしてなにか答えらしい物をみつけて安心して眠ったらしかった。起きると答えを忘れていた。ぼくはまだ生きていた。なぜなら木曜日に明日香が部屋に来てハルから連絡があったからだ。

三年がたって、それで貯金も底をつきかけていた。ここまでよくもったのは生きている人間でいえばハルと明日香のおかげだった。コンビニの週二のバイト以外の何かをしなければいけないとも思うのだが。そうなって初めてほんとうにどうなるのか確かめたかったというのもあってあえて普通にしていた。それに三年費やした。どうなるのかというほんとも最後を一年でも一ヶ月でも一日でも知ることができたであろうに三年だった。考えるのが嫌だったら就職するのがいい。工場に勤めたもの答えだ。

４年目にそれはやってきた。ぼくの口座は千円単位ではなくなり入ってくるあてはなかった。コンビニのバイトも終わっていた。ぼくの所持金は一万九千五百二十八円だった。

ぼくはぼくの部屋も今月中に引き払わねばならなかった。ぼくはわ

ざとこれらを望んでいた。明日香もハルも「わたしん家くる？」といってくれた。ぼくはどちらにも「うん」と答え「どーにもならなくなったらいくから」とわがままな答えをしていた。

　で、ぼくはこの三年の間に望まないことはしないことにしていた。ぼくはこの国のしくみは守らなかったがまちがいなく自分の王国の王だった。全部捨てた俺に果たして何が入ってくるのだろうなどとは思わなかった。ぼくは生きることを望んでないわけではない。だてにハルの作り上げた部屋に三年住んでない。ぼくは望み通りに生きるのだ。

はたしてぼくの望みはこの部屋を引き払い一ヶ月先の食い扶持と半年先が見えないことなのだろうか。ぼくはこれらを望んでいないとはいいきれない。これらは一般論だ。ぼくは一般論に否を唱える。ぼくはそれもおもしろいかなと思い、いまよりもしたいそれを選ぶ。したいこと一つに打ち込める奴は最高だ。それを掲げ叫べる奴はすごいと思う。

それが嘘でないように彼らにぼくは祈る。ぼくは嘘だらけでそれらを一つ一つ削除して

今を生きているからだ。

だいじょうぶだ。ぜったいだいじょうぶだ。迷信だ。それは迷信だ。燃やして捨てろ。

みんなひとりひとり犠牲になって答えをだしている。多数をつくるための犠牲だ。十二対一じゃ十二の勝ちだ。だがぼくは犠牲を恐れる。ぼく自身の犠牲を。犠牲になどなりたくない。十二の内の一になどなりたくない。ぼくは逃げた。ぼくは答えなど出したくはなかった。自分の内面が自分に一番に似合わない柄のシャツだ。ぼくは既製品のシャツでそれを済ませた。言葉も同じだった。ケツにむち打って走った。ぼくは最高の逃げ馬のひとりだった。ぼくはサンダルを突っかけシャツをまといジーンズをはきひげをそり髪を切り顔を洗い小銭をポケットにじゃらじゃらいわせとびらをあけ外を歩く

とぼくはぼくだった。でもそれはだれでもそうだった。それは基本の部分なのだ。伸びた髪を切ったり。お腹がすいた気持ちを静めたり。服を着て歩いたり。眠ったり。だれでもなのだ。ぼくはこの世に必要のない人間なんていないのという人の脳髄のぐるぐるの運命の糸の人と人のつながりが見える頭ん中をめくって敷き詰め地図にしたかった。

どこにいたっていいときも悪いときもある。ああこれがいいときでああこれが悪いとき。

そしてそれすらを忘れているとき。自分のできる範囲のことを人と同じだけ人にいわれるだけ法律できめられた範囲でやってるだけ。それを苦労だとか努力だとか愚痴いわんでくれ。よりかかるものが欲しいんだ。自分の考えに、テレビの中、雑誌の切り抜きに写真達。雨の音、気温、匂い。タバコの煙、ビールの泡、ダーツの的。

「ねえねえ、同じ音をずらして一度に聞いたことアル？」
「電気屋さんで一斉に、かるく十台はあったわ」
「そこの店員と知り合いなのよ私」
「彼バイトなんだけど今日で最後でくびきりみたいで」
「彼のインディーズのＣＤ」
「売れ残りなんだけどその店に置いて貰ってたらしいの」
「一秒ごとずらして再生」
「大音響ゲリラライブだって」
「明日、正午」
「雨天決行」
「場所？」
「場所はかっぷらちょうきちがいどおり三の三、バカスカ電気」
「じゃきてね」

ハルの情報は確かだ。そしてぼくを呼ぶときだけだろう。場所を教

えるとき住所を知らせるなんて。どこだって聞いてそれはないだろう。ぼくは夏光町５の４、ひまわり書店に急いだ。そこは地図を売っているのだ。ぼくは早速カ行の棚の中からきちがいのキ通りを探し出し。ファイルの中から一枚を選んだ。なかなか良くできた地図だった。

二十歳を過ぎた女が一回目の引っ越をしてきてつくったような綺麗な薄目の細い女線で正確無比。線の繊細さに比べて大胆さと遊びこころに充ちた理想溢れる文字。これで８０円は安い。年代も比較的新しく場加素加電気も載っていた。ぼくはそれを折り畳んで財布にいれ店を出た。ぼくは明日これを超える地図をつくる。そうだここでバイトしよう。ぼくは地図マニアの中では比較的名の売れた作家だった。ぼくがその店を見つけ。システムを知り、店に出入りし、かれこれ数十枚の地図を買い売った。

「キミの作品評判いいよ」

「うちこない」

店長に誘われていた。今日はバイトの留守番がいるだけで店長は不在だった。明日だ明日。ぼくは履歴書代わりに割賦羅町基地外通りの地図を店長に持っていくことを決めた。

最初はあまり地図を買うからそんなに買われちゃ困るわと言われたのがきっかけだった。

売り物を買って苦情を言われるのはどうかと思うのだが。あんた買った分だけ書いてきなさいといわれ地図を書き始めた。独学で始め店長に基本や修正点を教えて貰った。地図にはいろいろな種類がある。今回のぼくのように住所をがわかっていてそこを知りたいとき。例えば場加素加電気で単独に存在する地図もある。品揃えがすべてでもあり探し方にもよる。抽象的な表現、例えばなんか派手で脂っこい場所とかの検索も可能だ。探すのは自分だしあるとは限らないが。一日トリップ旅行ツアーようの地図もある。地図の通り歩く遠足の日程表のような物だ。仕事は主に地図の販売、調査、仕分け、

作成がある。作品によっては非常に価値があるものがあり作者によるブランドも存在している。

「はい。ひまわり書店です」
「あの、急ぎなんですけどファッションヘルスパヤパヤでお願いしたいんですけど」
大抵はこれだ。
「はい、えーと、少々お待ちください」
「お待たせいたしました」
「そちらですと３００円からになりますがよろしいですか」
「はい、３００円コースでお願いします。」
「それじゃあ電話番号または住所お願いします」
「はい」
「はい」
「ええ、わかりました」
「それで引き取りは」
「郵送ですと今日の三時には発送できますが」
「あ、店の方にいくんで、」
「そうですか」
「ちなみに何時頃になりますか」
「九時頃なんすけど」
「かしこまりました」
「それではおまちしております」
「ありがとうございました」

風俗店の場合、大抵は抑えてある。重要なのは閉店していないか、名前を変えていないか、場所を変えていないか。幸いパヤパヤは新規店で地図の更新は先月の内になされていた。パヤパヤの地図を出すのは今週で五回目だ。売れ筋だ。
ライブの後、割賦羅町についての地図を書き上げ店長にみせた。ぼ

くが今すぐにでも雇って欲しいと告げるとすぐにでも入ってくれと言われた。居住不定のぼくは三階の屋根裏部屋をあてがわれた。天井が低く斜めになっているのでよく朝起きて頭をぶつけた。低いところに布団がしいてあり、体を起こすところまではいいがそこで立ってはいけないのだ。

そこでの生活とは馬があった。所属するということが苦にならなかった。ぼくにはとりあえずひとりになれる静かな所と布団、食費が必要だった。ぼくは仕事で交通費を得た。ただで色々な所を廻れ、そこにいる理由も仕事としてあった。ぼくてきにぼくの望みの大半があった。仕事をして成果を上げる前から過分の設定だった。ぼくは過分には過分で答える律儀な性格だった。

ぼくは真っ昼間の一時間前から飯屋でカツ丼を食っていた。オレンジのお新香とみそしる付きのやつだ。客はぼくの他にひとり。ぼくは店屋でテーブル番号を自在に操るのが最近得意だった。ぼくは朝から確認していた今日のラッキーナンバーである4番のテーブルを射止めていた。ぼくは店をで仕事に取りかかった。

あるいは眠りながら今日のことを想像し造り上げたとおりに一日は廻った。だが一日すべてを夢見ることは難しい。一日の基本的な部分は夢の通り実現がなされそれ以外はそれ以外がすべての今日の大事なことだったとはぼくは文字通り夢にもおもわず今日という日のほどよい達成感とあたりまえな一日分の脱力感に浸っていた。ぼくは気づくとまた横たわり目を閉じる寸前だった。たぶん考えつくこと以外のことがアルから明日というものが有るんだろう。ぼくは死を恐れないつもりではいるがその近くまでいって本能的に眠くなるんだ。だから明日が来る。完全でない一日がはじまる。

はじまる時点でそうなんだ。ぼくらは必ずしもそうならないことを

知っている。好きだといってもそれが正確には伝わらないこと。わかったと言ってもわかっていないこと。それは快感だ。どうなるかわからない。どうゆうふうに伝わりどれだけの効果をあげるか。わからない。決まってない。ギャンブルだ。　何時何分何十秒どこそこの場所でなにがしの色の服を着て言葉を発する。好きだ結婚してください。そうすれば叶うと言えばするだろうか。この世では信じる力が大事だ。たまたまあなたの大好きな人がどん底の精神状態で誰かにすがりつきたい気分でそこにあらわれたらどうだろう。それがだまっていても明日になればなおるものだとしてもそのときその瞬間を逃さなければ願いはかなう。

ハルからのメールは金曜の夜にはいる。酔っぱらっていれてくるんだきっと。しかしぼくはそれがうれしく真面目に答えるところは答える。

（チャンスの反対語は？）

Ｒｅ：（チャンス）

Ｒｅ：Ｒｅ：（となりの男はピンチっていってる）

Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：（どっちの言い分が好きなの）

Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：（あなたがてきとーしてるんじゃなかったらあなたの方）

Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：（その男にあなたの反対は？ってきいてみ　後ろ向いたら正解　あなたを見つめ返して君かな？なんて答えたら　失格）

Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：（今度土曜日八時半戸人町鏡通三一五ＮＢビル７階居酒屋どんにて）

Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：（了解）

木曜日に明日香がぼくの屋根裏への階段を上がってきてそれは朝六時でぼくが当然寝ていると思ったらしく脅かすつもりが逆に驚かさ

れたと言った。ぼくは場所と仕事を変えたがハルと明日香との関係は終わらなかった。この世は悪いもんばかりでもない。普通もんばかりでもない。

月の優しさに涙が出るよ。最高だ。ありがとよ。どうやら本気で惚れられてんみたいだ。

礼儀もくそもおれはいつだってそうだったろ。だからそうなんだろ。お前は情け深いな。

まるでおれみいだ。いや違うか、違う。違う。ごめん。間違った。すきだよ。

ワンオブざなんとかってやつ嫌いだ。もっともおれがホントの訳をしらないだけかもしれないけど。わんおぶざなんとかってやつはきらいだ。わらってんだろきらいじゃないだろこうゆーの。じゃあなまた。つぎに会うのはいつになんのかな、またな。こりづにまっとけよ。おもしろいのようういしとくから。

ぼくは同じ事を言っていた。同じ事をやっていた。すみかと仕事はいくつか変わった。

答えがなければしゃべっちゃいけないのか？それはただ複雑にさせるだけなのか？じゃあ答えがどんな意味をもつかって考えた上でしゃべるやつはいるのか？そんなやつばかりなのか？今日のいいことが明日に続くのか。未来の悪い出来事は昨日のせいか。時間は一方的に流れているのか。ひとりでいてもいいことと悪いことがある。ふたりになってもそれはそうだ。幸せの入り口が二倍なら災いの口も二倍。子供が産まれて３バイ・４倍。流れは太い方がいいのか細い方がいいのか。丸太に針金。

地図造りにかかせないのは極細のペン。定規。紙。本来まっすぐな道などないから何度も線をずらして引く。しだいに形が見えてくる。道を中心につくるやる方で難しいのはどの方向からでの見方を地図

上に示してやるところにある。目的地を据えそこを中心にするやり方はまた別だ。一方通行でよいものとそうでないもの。ぼくは死を捉えるべきかそれが目的地なのか。人生は中心をぐるぐる廻るものなのか、あるいは自分がその中心そのもので向きを変えているだけなのか。とりあえずよくいく牛丼屋の地図ができた。

明日香が来たとき言った。
「書いてみるといい」
白い紙を渡した。
「なにを書けばいいの」
とりあえづこっから家までの道のりを書かせた。
「ここへ来たのははじめてだろ。帰り道を想像して書けばいい。来たときの反対に」
明日香は縦長の紙の中心に十字を切って上を北にすれば北の線上の頂上付近に横長の四角い箱を書いた。そこから南に道を延ばすとそれは西の方に急カーブを示し西の線上から外へでた。
「はみ出ちゃって書けないわ」
「でも、ここからまた戻ってくるの」
道は西南西からぽっと湧いてきてなだらかに南南東に向かった。
明日香の地図によればぼくの家は南南東の方角で僕からすれば北北西にアルらしかった。
もっともこの地図上での仮方位でのことだった。
「こっからここまでまっすぐはこれなかった？」
ぼくは直線でふたりを結んだ。だがそれは味気ないものだった。ふたりを結ぶ最短で最速のルートはふたりの関係を絶ち切るカッターの線に近かった。もっともそんな道はなかったが。
「自分地を北に配置するのはお嬢様をイメージさせるけどいい嫁さんになるぜ」
ぼくはしった口をきいた。全部てきとーだった。
明日香はじっと地図を眺め、やがてあれこれ書き込みしはじめた。

目印のコンビニ、看板、最寄りの駅、右手に見える大きなビル。
フローリングの床に紙を起き書き込みに夢中になっている明日香の垂れ下がった髪の隙間から見える横顔を見ていた。
「けっこう難しいのね」
顔をあげてこっちを見た。
ぼくは床にふっーと息を吹き付け地図をとばした。
「あーなにするのよ」
膝をつきながら追いかけ手を伸ばし取りに行く彼女の後ろをとった。腰をつかんで抱きかかえた。引き寄せ胸に手がいった。そのまま仰向けにふたりたおれた。ぼくのまっすぐに対して彼女は少しづれて乗った。
「地図みたいだろ」
といったがちんぷんかんぷんだった。
ぼくは結構ひとりでしゃべっていた。めづらしかった。
ぼくは必要以上にからみついた。寂しかった。ひとりでいるときとひとりになるときの事をふたりでいるときに考えた。
明日香の頭がぼくの左下にあった。明日香の左足が僕の両足の間にあり右足は右下奥だった。
ぼくはシャツの下から右手を入れ胸の間にはわせた。そのまま体を横にして左で背中をさすった。腰を廻し片足を立て絡ませた。
首筋を吸った。今日の手がかりだった。

静かに時は流れていった。とは簡単に言えない。止まっているのだ時は。ぼくの体内だけが活動している。魔女が煮込む時の鍋をぼくはその家ごと取り込んでいた。ぼくの目はすべてを写真のように捉えた。四方八方が変わる紙芝居だった。ぼくはそれを破って先に進んだ。何ものも敵ではない感じだった。

「わたしには両親がいて望まれて生まれてきた子には違いないんだろうけどそれに意を唱える気はないんだけど、どうしてもなっとくできないことがあって、それは、わたしはこの国のこの土地のこの町のこの制度に、あるいはその逆でも途中でもいいわ、それにおもいっきりっきらわれているというか、いじわるされるというか、はじかれてるの。ものごころついたときから」

「ぼくの前世はおそらく平和な国の王様かその国の王侯貴族、人でなかったらジャングルの奥地に住む大蛇で間違いない。ぼくは贅沢と無駄を好むように見られるがそれは結果でしかない。たとえば腹が減ってぼくは極上のシュークリームを注文する。シュークリームが食いたいからだ。喰いたいときに喰いたいものをよりよいものをできうる限りの最上を望む。そいつができてきたころにはたぶんもう半分くらいはシュークリームのことはどーでも良くなってきていてできてきたものの半分でもう十分になってしまう。それをもういいと下げてしまってから、その味の上等さの本質にきづいてもう一度呼んでみるともう皿の上は空って訳だ。で、ややもするともう一度ってことになる」

ぼくらはみな寂しさを感じないわけではない。そうなる前にみな手を打ってある。だけれどもそうしたからといって十分な恩寵が受けられるとは限らない。誤解を招くだけなのかもしれない。ただ待っているだけが大事な難しいことなのかもしれない。二つのもの。自分には同じに見えるもので実際は同じでそれを買うときにはやすい方を選ぶのにそれを貰う段にいたって高い方を選ぶのは常套手段。例えば何年も計画を練り設計を建ててきたものがありそれと同等のものが目の前に一夜にしてなる。それが同じ水準なら問題はないがその一夜のものが何年ものに勝ると自分の目が残念ながらも捉えたらどうするか。どちらも自分の手にありどちらも自分の判断で使えどちらか一つを選ばなくてはいけない場合。いろいろな言い訳とと

もに答えはでるだろうがぼくはよりよい方のものを選ぶだろうと思う。んーん。しかしこれは難しい。こんな簡単に答えれる問題ではない。答えもだが問題の方もより細部にわたって場合付けする必要もある。

ぼくは宝くじが当たっても幸せにはなれないことを知っている。それは実際に当たったからではなくて常に幸せというものを考え求め続けているからわかるのだ。なんだろう。ぼくはかんがえる。何で働くんだろう。なんでお金を得るんだろう。この世に何かぼくを救うぼくの望みなるものが何なのか考えた。

ぐあんがんとぼくの前をひとがながれていた。ぼくは壁に背をもたれ広告のビラをけつにしきぼくのとなりにいる色彩のグラデーション。女達は次々にお相手が迎えに来ていた。ぼくは時間を潰していた。時計も見ずに。また女がとなりに立った。さっきの女と違ってきちんとすましている。付き合って間もないのだろう。この都会でひとりではいきていけない。

ソレにしてもぼくはいい位置を占めていた。川の流れの端のあのうねりのところ。穏やかで生ぬるい。女は場所を変えたがぼくの目線の内だった。最長記録を更新中。男は来ない。また場所を変えた。ぼくの隣だ。そこはいい。幸運の場所だ。ぼくはおもった。もうすぐだ。

遂に来た。ぼくは6人ほどのカップルの待ち合わせを成立させた後席をたった。

幸せはそれを信じて忍耐強く並んでいるものの順番待ち。ぼくは路地裏でひとり見ている。並ぶのにぶち切れて唾を吐きそこから抜け遠吠えをし駆け足で道から外れる足を見ている。ぼくは並ぶ人の足もみている。並ぶことが幸せだ。それをぼくは見守る。道をそれたものが急ぐその先を知っている。並んでいる先頭にいつか対面でぶ

つかるのだ。うまくいってそれだ。後は知れず。ぼくは今日も行き交う足を眺めている。

幸せは望んだものに与えられる。望んでそれをいれる袋が有れば入る。いっぱい望んでも小さいものには大きなものは入らない。反対にとりこまれる。迷い自分を見失う。

風船をゆっくり大きくふくらますんだ。たくさん幸せになりたかったらまず沢山のふくろをもつかおおきな袋をもつんだ。あれだ、こんな話あったろう。宝探しにでた冒険家、海賊と戦い、船が難破しても意地でたどりついた宝島、金塊、財宝ざっくざく。これはすべてわたしのもの、この島から出られない。やがて骸骨、馳走様。幸せは幸せという袋に入り不幸という袋には不幸が入る。

ぼくは自分がちっぽけなのを知る。ぼくは世間のうそを知っている。でもそれは誰もが知っている。自分を知ったときにはそれをもう変えられないところまで来ている。

反対方向のドアから入って出ていく。

空が動いているのか、雲が動いているのか。これは何なんだと思った。路傍の石から路傍の塵へ。もはや見つけることすらあたわず。

ぼくはあらためて流れを感じる。それにあらがうことは愚かなことだと思ってしまう。いまぼくは幸せだ。なにがなくとも幸せだ。

いや世界っておもしろい。世界は毒と薬。作用に副作用。なにを望む。赤かい。ならとればいい。つかめるさ。あんたにゃ許すよ。世界は。その前に気をつけて、赤に混ぜるとピンクになる。白。捨てないとね。ピンクはのぞんじゃないだろう。混ざったものを分けるのは骨が折れるよ。そのときはぼくの出番だ。あんたにゃ特

別だ。たのまれたら嫌といえない。残念だけど。こうした関わりであなたに介入するのはほんとに残念だけど、ぼくはあなたの幸せを祈るしそのために涙のむよ。残念だ。ほんとに残念だ。ぼくにできるのがこれだなんて。あなたにたいしてぼくができるのがこれだなんて。好きなのに好きだから残念です。

ぼくは職人のように作業をこなす。感情を移入しないって事は本気じゃないんだと思われるかも知れない。今あるものを捨てて得られるものは今あるもの以下でも以上でもない。たとえ全部を捨てても全部がはいってくるだけ。目先は変わる。気分を変える。それだけなら引き出し程度で十分だ。全部なんて。

最近、流れがかわったのを感じていた。それは誕生日が来て年が一つ増えるのとは別物の変化だった。自分の境遇を変えようとはしているが特に変わった気がしないのに流れだけが変わる。周りの変化だ。時代の変化というにはおこがましいがそいつのほんのちょっとの変化に違いない。だれもがきずきニュースになり歴史の一ページを刻むのではなくひとりの人間の呼吸の仕方が変わった。周りの変化に築き自らをすこしづつへんぼうさせる。

「あなたは何がしたいの」
「何を望んでいるの」
「どうなりたいの」
「教えてよ」
「どうせわたしの力なんて必要としないんでしょ？」
「あなたはなんでもひとりでやるのね」
「だからなんでひとりでやるのかじゃなくて、聞きたいのは何を何のためにしてるのかってこと」
「たぶん一生答えなんて出ない問いを自分に掛けてるのはむだなことか？」

「あなたの問いはないからこたえもない」
「答えがないのは真理、問いがないのもあなたのただしさ」

「とりあえづやってみれば」
「あなたはこれまで失敗ばかりというなら、自分がまるっきりだめだろうと思うことをやってみればいい」
「自分が間違いだという判断をくだしれみればいい」
「案外せいこうするかもよ」

「ありがとうございます」

「ハル、なんかオレ、発情しちゃった」
「年中、そうなんじゃないの」
お互いそうじゃないことをわかっての会話だった。
面と向かってそういいたかったのだ。
「なんかオレが女でおまえが女みたいだな」
「はっ」
「何」
「もっ回いって」
「おれがオンナみたいだってこと」
「何々」
「なんて言った」
ハルはおかしくてたまらないようだった。
ぼくは腹もたてずに真剣だった。その考えに揺るぎはなかった。
「何が男らしさで何が女らしいかってことを君は言いたいんだねよ

うわ」
「わたしはあなたが男らしいと思うは大抵の誰よりも」
「それでいて女らしくもあるはわたしが気に入る範囲でのオンナらしさをもってる確かに」
「あなたはみかけによらず欲張りなのね、きっと」
「らしさってものはつくるもの」
「さみしがりやでもあるわ」
「わたしが欲しいの？」
「わたしの男の部分をたべてね、そして消化して、理解して、自分のものにするの」
「わたしはあなたの女らしさをいただくわ」
「何プレイっていうんだろうね、こういうの」
「同性愛もそうでないのもどこか同じところはアルのかもね」

ぼくはプレイをプレイした。
どこか肝心なところを英語ともいえない英語で覆い隠していた。嫌いだ嫌いだいうわりに浸かっていた。それこそがアメリカの強さなのだ。言葉にできぬものを言葉にする。しようとしてそれが間違いでも恥ずかしくても教訓とする。

「ねえ」
とハルはいい。

「やりたい」
とぼくはいった。

「ハル、お前がほしい、今すぐしたい」
「おれが道路をならすローラーならお前を思いのままにぺっしゃんこにしたい」
「その目を閉じさせたい、二つの目を閉じた顔が見たい」

「だから目を閉じて」
ハルはそうした。

ぼくはその顔を眺め両の目の下のくぼみに親指をのせ耳の上の髪を後ろにおしこんだ。
そのまま後頭部をつかみ頭をかかえこんだ。うなじにあてた指に力をいれると顔をあげた。こんどは首を生首のトロフィーのように掲げた。喉仏をべろべろにした。カリをしゃぶりあげた。鼻息を感じた。疲れたのだろう。はらをおしこんで腰をひかせ奥へ押しやったハルの脇に入り込みうらすじもせめた。ぼくらはゆっくりベットに落ちた。ぼくはハルの頭をがっちりそっと手のひらでかかえこんでいた。ハルは目を閉じたまま興奮しているようだった。左頬のしたがときどきゆるんだ。くすぐったいのだろう。ぼくはへその上あたりを右手で押さえつけたまま左の一本でハルの下半身をあらわにさせようとしたがこれには時間をようした。ハルは腰と足をあげ手伝ってくれた。ジーンずを脱ぐとき足をばたばたさせた。ぼくはまだソレが脱げない内から両の足のももに顔をうずめていった。

力小さきものよ、思い大きものよ、せめて思いにふさわしき力もて、思い溢れて沈む前に、力尽くせよ、ある力。

ぼくは完全にとっちめたかった。だから最初に言ったとおりだった。ローラーで潰したインだ。ハルを。ごみに例えるなんてまるでくそだが紙屑みたいにくしゃくしゃに潰してしまいたい。ぼくは上になり小さな両肩をつかみながらさらにハルを小さくしていった。

思いかけた時に勝ってない。手にしてない。これで終わりにしたいのか。己の弱さを認めたはずじゃなかったのか。

今日は蠅を立て続けに三匹も潰した。それが成果。確実に一匹づつ、

出てくる度。
「うるせー」
「オレだけが生きていい人間だ」
「お前らに何がわかる」
「返せ」
ぼくは声に出す練習をしていた。
ぼくはいつもここから出たがった。
ぼくは殺されたがっていた。
ぼくはあらゆる罠を回避できていた。

「壊すんだお前が。正しさで生きてるやつなんかよりよっぽどいい」
「お前の地図は正確だ」
「手応えがない？そいつは嘘だ」
声に出していた。

で、ぼくはこの目つきを、視線を、気に入っていた。平行なレーザービーム。両の目からベニア板。ときに下敷き。そしてやはりビーム。このライン。

昔のなじみが東京へ来た。ボギーだった。リーダーは元気してるかとぼくは会社内でホンとのリーダーとなったボギーにぼくらのリーダーについてきいた。「なりたくてなったんじゃねえよ」
「わかるだろ」
「ああ」
「はめられたしよ」

ぼくがまだそこにいたころ、ひとりで上京することがあった。
「エネルギーもらいんいくんだ」ってボギーにいったもんだった。
ボギーは照れくさそうに「もらいにきた」といった。
飲み屋につれてった。

「どこいった」
「ん」
「昼よ」
「ヘルス」
「ああ」
「で、」
「どうだ」
「こっち」
「ああ」
「おれはあれだやっぱ都会はあわねーな」
「ヘルスの子がか」
「なにそっちのこときーたの」
「いや」
笑った。
リーダーは地元の消防団をまだ続けバイトを何個も掛け持ちし農業をし町の青年部のなかではひとかどの奇人と呼ばれているらしかった。

会社つとめをしていたとき東京へ行っていたのは事前調査だった。はたしてこの会社で一生やっていくのかと疑問をいだいた。だれもが抱く疑問で答えを出したやつとそうでないやつともうどうでもいいやつとわすれてしまったやつとくちだけのやつとさまざまいた。こっちきて生きていくビジョンをシュミレートするんだ。まずは職を見つけて部屋探してそれから。どうする。給与もらって、ナンパでもして相手されなくてヘルスにでもいって。仕事して酒飲んで。なんだ同じだ。

「そっちは相変わらずか」
「ああ」
だれだれがやめ、だれとだれがけっこんし、だれがしんだ。

そんな話を聞いた。
「仕事は」
「ん、おれ」
「地図屋さ」
「なにそれ、金なんの」
「いや、ぜんぜん」
わらった。
「どこにもなんにもないよな」
「ああ」
「だからどこにでもあるんだ」
「ああ」
古い話でもりあがった。
「昔さ、バンド組むっていってただろ」
「あった。あった」

あっちでもこっちでも語り合う未来はせいぜい一週間先のこと。
ぼくは最しょっからゴールにたどり着いている。自分の墓をつくっている。自分で、働いて。その途中、殺されたい殺されたいって。って殺し屋を雇っていざ殺し屋がやってくると何とかうまくいって帰ってもらう。この繰り返し。ここは死に向かって走ってゆくところあっちは死に向かって歩んでいくところ。

「追い込まれたときってさ自分のやってきたことしかできないよね。私それでいいと思うのよ」
最近、明日香が荒けだしていた。
「わたしをちゃんと理解してほしいの正確に誰よりも間違いなくつかんで欲しいの」
「あなたにしてほしいの」
「あなたができるの」
「して」

「ちゃんとして」

人を理解すること、ぼくは人の弱さに関してはその見立てに自信があった。
ただむやみに見たりはしない。無理にみせられることはしばしば。明日香の事を理解してやることも時にはできた。でも、あえてしないってのがぼくのパターンだった。
人に弱さを見せないでくれ。見たくないんだ。そういうの。
みせたいって思ってやってんならやめてくれ、きづいてんならきずいてくれ。
と、思ったがいわない。

がたがたがたがた、整備不良の下り坂。荷物で一杯の軽トラがエンジンブレーキだけで降りていく。

「あなたはしゃべって誤解をされるのをおそれている」
どんな世界がある。自爆する前に考えろ。あいつも嘘。あれもそう。たまたまの一部分だけを見て自信を失うな。たまたま相手の絶好調。気をつけよう明日の天気。

なんだかおかしかった。ハルとぼくとはこんなセックスになるとはおもわなかった。

ぼくはなんもかんもぶちまけた。みんなしんでしまえだとか、幼いけれどホントの気持ち。ほんとにたとえば世界がぼくひとりになってしまったら、世界は虫達の増殖とカラス、こころぼそさ、ぼくは何年持つだろうか。

自分の力より大きなものをとろうとする。とっているやつがいるからだ。実際。けれども自分はとれないし、とってもためにならない。

始めから言やいんだよ、だめだって、ならんものはならんって。それなのに努力がすべてを叶えるみたいないわればっかりしやがって、忍耐ばっか強くなってさ。

ぼくは電話に出るのをためらった。ぼくにたいしての人の用事にかかわりたくないのだ。
わざわざわざわいにはいっていくことはない。それは若さの特権ではない。

「親がさ貴方に、おばあちゃんがさなんて話しかけてきて、あなた、おれの婆ちゃんはまた生きてんけどあなたのはとっくに死んでんじゃねえかよ、なんて言ったことアルでしょ」
「かってにオレの立場にたってものいうなとか、それによって自分が勝手につかわれているような気がして、オレを返せとか言ったでしょ」

ひとが大丈夫だって時に不安がり大丈夫じゃないときに安心する。
何にしても少数派。メンシェビキ。

でもぼくは虫の息だ。このだるさは脳内物質がたりないせいだ。暗がり、温室、水、を求め静かなら願ってもない。

朝から頼みもしねえいいこと情報をテレビが騒いでやがる。不機嫌な朝、起きる直前の夢であくせく働く夢。

状況をうけいれることになれてしまってる。自ら状況をつくれ。

ぼくは生活を生活していた。
綺羅星ばっかじゃねえからな。

漫画の中の1巻からすでに言っていた。
この世界、たった一つ価値アルものは自分でつくりあげたものだけだ。なんて言葉の意味がわかりかけてきた。自分の中にあるものを完璧に何か形にしてあるいは表現できたらと望む。１００アルとして１００出したい。

はじめはそう。やりたいだけで女が欲しいとおもう。つぎに好きといって欲しい。つぎはいうことをきいてほしい。

そう答えるのは今ただそう思ったことをくちにしているのか、いままでこうしようとしてきたことの結果か。

失敗だけがすぐに形になると思ったら大違いだ。

諦めることが死。と大家の老人は言った。死に至る病は絶望だと青年将校はいった。
絶望や諦めの中で生をかろうじてあきらめず手がかりを集めて文章にしている。すなわちそれは細々とした生であるが集めた生を組み合わせて編集する。手がかりがなにひとつつかめないときもある。しかし、生きている。より輝けるものとするために、それを自らつかむために。

「あなたホントに柱を見たって言うの」
「あなたは頭がいいから、それをけして見ちゃいけない」
「あなたは理解するわ、自分がうち負かされる姿を」
「いまはまだ駄目」

「じゃあオレが見たのは」
「まだあれが外堀だっていうのか」

「あなたはまだなにも見ていない」
「この東京の何がわかるって言うの」

「柱?、中枢?、」
「わらっちゃうわ」

「もういい」
「もういいから」
「いわないでくれ」

牛丼屋でひとり飯を食う。雨宿り代わりに女子高生の集団がだべってる。ぼくが高校んときにはこんなのなかった。携帯も。
カウンターに腰掛け足をぶらぶらさせる。米粒の一つ一つを数え上げようか。
女子高生のひとりが言ったことにだよねーとみなうなずく。
何もない時代に生まれた。腹をみたしてどこへいくのだろう。みな、どこへ、なにを、。していることに意味はあるのか。ぼくは意味のないことを惜しみながら一番だれよりも無駄にする。
ケツを向ける女子高生。足をおっぴろげる女子高生。ぼくはみそ汁をすすった。また明日といって別れる女子高生のあとからごちそうさんといって店をでる。

「ねえねえ、進路相談に乗って欲しいんだけど?」
ぼくは興味を引くような怪しさをちょこっととこいつからならいつでも逃げられそうな気弱で抜けているような感じを自分の中でかもしだしながら話かけた。
ちょっと惑った後、ぼくを上から下まで眺めて
「おにいさん、ぷーなんだー」
「占いにでもいけば」

「そうそう」
「いいよね、占い」
「占い？」
「なになになに、それどこあんの」
ぼくは半分にも満たない好奇心を何十倍までにも引き上げた。
「有名なの？」
「いっしょいこうよ、つれてってよ」
女子高生のふたり組はひそひそ話を決め込みぼくをつれさった。
ホントに食うのかとみていたがくった。ぼくも食った。キャラメルアーモンドソフトオレンジソースミックスはパラソルのみどりによく映えた。雨降りで客はいなかった。はやりだかわからないがこれがヨーロッパ風オープンテラスとかいうのだろう。
３０分待ちとのことだった。

「大抵は嘘よね、命かけてますなんて、そんなわけない。それは大人の発言、裏をとってあげないと。こっちのほうが」
「ほんとだらしない。ほんとに死んでしまった友達を何人もしっている。ほんとにすごいことをやってむくわれなかったのをしっている」
「悪いとはいわない。汚い。例えば二十歳で勤めたとして、定年の六十まで四十年。そんな社会よ。そうじゃなきゃやってらんない。特殊な世界。みなで嘘つくのもわかるけど、自分たちだけよね、わたしたちはわかってあげるだけあげてわりにあわない」
「自分勝手。私たちはそんな社会に何も言わない。だからなにもいわれたくない。わたしたちは嘘を黙認してるからお互い様」
「わたしたちからみてそんなに偉そうなことしてるようにはどうしてもみえない、４０年は自分が選んだ事よ。過去にそうだったとし

てもそんな権利はないはずここにしか。あのひとたちは生まれたことがかなり偉いらしいわ、自信になってる。わたしたちと逆の発想をもっている」
「でも、自分に自信が有るんだったら私たちにかまわないで欲しい。いちいち一緒の世界に生きているように確認しないで欲しい。弱さを見たくない。弱さを食べたくない。私はじぶんで精一杯。私は文句なんて言ってないでしょ」

くれっぱなしの視線で前ばかりみている。溶けかけた氷の湯気。
「これからどっかへいかないか」
「どこかって、占いいくんでしょ」
「怖くなってきた」
ぼくはひとりになりたがった。いっこくもはやく立ち直りたかった。待ってなどいられなかった。
一番輝いている星から右に二番目がネバーランドなら簡単だと思った。
突然すごいバランスで世界が成り立っていることをしった。

道を眺めると人は働き過ぎだった。
「働き過ぎだよ」その先に何が待っているのか考えているのだろうか。
「考えろ」自分で考えろ。機能的であること能率を重視するのか。何を守って生きているのか。それをすることで誰が得をし誰が損をするのか。誰の味方をすることになるのか。誰と敵対するのか。ネズミが逃げだす船で猫は大事なものを探している。いまの世界がいつまでもあるとはおもわない。大人は子供を恐れている。進化をおそれ、老化をおそれる。恐れが社会をつくる。どうしようもない嘘、それに気づかないわけはない。まあ、つかないよりはまし。なんにも代わり映えしない。変わったのは月日で歳月で老化したということで死に一歩一歩、備えなしに踏み込んでいっていると言う

こと。

ぼくの胃袋は都市の大洪水で大変な有様を予定していた。今日はちょっとそうしたかったのだ。甘い珈琲の海。炒飯の土壌に生春巻きのビル。イタリアの赤い雨。救助に向かうチーズのボート達。そしてさらに横になる天災。難破船。

でもやっぱり貴方は死ぬべきです。今日は失敗です。死ぬべきです。死んでしまったら今日の責任を感じて明日起きてください。起きるのが嫌ならせめて生きてください。光を与えて暑くします。起きるように。光を外して寒くします。寝ていられないように。

夜、部屋を暗くして横になり、思う。徹底的に考えよう。何をなぜをどうしてこれをあれかいやきっとそうだ。いや違うきもちいい。虫の音。自分という存在。重み。支配圏。虫の音。息。吸って吐いて。

終われればいい。止まればいい。あしたの世界が。自分の世界がなくなって・自由をてにいれる。また一から始める。

今日の自分を振り替える。それが何になるのか。今日の積み重ねがいい試しがあるのかわからない。むしろ鎖に焼きを入れ冷やして強度をましているようだ。

オレはここからでるんだ。この流れを変えるんだ。自分だけの安心を手に入れるんだ。いまは人に預けているだけだ。いつか返して貰うんだ。

聞かせてくれ何をすごいと思う。何を信じる。何を追いかける。

ロマンチックと現実的の中間で愛する。

眠くなってきて、なめくじのような大岩がとけていく。その隙間を逃すな。手を差し入れ捕らえて記録する。

障害の耳に潜む瞳。

欠片でもとれればいいほうだ。
根はしっかり張り、草ッぱだけ。

空の上にもう一つ空があり雲もあり、その上の方の空で雲がどうナッツ型にぼくの見える範囲での空全体を覆い。真ん中から夜が始まる。星が輝き流れ星。宇宙か夜空か考えた。
その夢の話をした。

「ねえねえ、カラオケいこー」
「お兄さんのおごりで」
「酒が飲めるンならいく」
「きまりー」

「ねえ、うたわないの」
「うたわない」

「ちょー機嫌悪い」
「もうーよってんの」
「かんじわるー」

いろいろあるけどこの世界があってこそだね。

ぼくは有り金はたいてみせをでた。
「くくく、くくく」リーダーの笑い方だった。
しらずにうつっていた。ぼくはにこにこめいた。

ぼくの未来は明るかった。
まだ月はぼくを刺していた。

で、やっぱり考えて動くんだ。
それが一番難しい。

その街のそのごとしファッションというがぼくのは部屋の中だった。
人はいなかった。
籠もりッきりといったわけではなかった。
珈琲メーカの湿潤は狭い部屋の空気を変えた。ワイングラスはワインの色を改めた。
ぼくはスーパーに行って嗜好品を買い占めた。珈琲。タバコ。ワイン。紅茶。ポタージュ。籐の床細工に赤い布。茶道具を並べ窓を開ける。この世がすばらしいのはどんなときか。シャワーをあビル。タイルに浮かばない水しぶきの隙間のようにかろうじて生きている。真実は贅沢だ。なかなか顔を出さない希少品。時に捨てたものを拾い返す。床に転げる。
匂いが届く。

こんなんじゃ忘れてしまうわな。

「もしもし、明日香ひさしぶり」
「うん」
「ああ」

「で、あえる」
「ああ」
「うん」
「わかった」
「ん、じゃあ」
「はい」

なんにも語れないぼくをいつも明日香はよくしてくれる。まあいつもいつも会っていたらそうではないのかのしれない。ただで死んでやるつもりはない。ふり落ちる雨の機関銃にさらされたい。イメージだけが先行する。はげしくうちつけられる。

「顔色わるくない？」
「そお」
「でもひさしぶりね」
「仕事はどう？」
「明日とかやすみなの？」

この扉からしかでられない。
あの窓からしか見られない。

「海老パスタにカルボナーラ」
「ピザ頼んでいい？」
「サラミとほうれん草のピザ」
「以上で」

きっと苦しみも喜びも新しくつくられてはこない。全部今ここにありそれらに気づかないだけ。実は空気を吸うことこそが害なのかも知れない。それで人は百年かそこらしかいきていられないのかもしれない。

「住めば意地になってでも都になるさ。悪いところなんて指摘されるとなおさら」
「あら、悪いなんていってないわ」「ほこりはひどいけど」
「ほこりはカルシウムのふりかけなんだぜ」
「ほんとなの」
「そうおもえばおちつくよ」

また惑星は軌道に乗った。明日香はぼくに安定を与える。幼いぼくの考えも微笑みのそよ風で明日へはこぶ。
「オレはおかしくなんてないぜ。考えてんのさ」
「そう、あなたはおかしくない」
ぼくは訴えをきいてもらう被告人で彼女はぼくに甘いインチキ裁判官だった。
「あなたはただまきこまれたくないだけ。あなたはよーくみえてるのね、そして自分で考えられる、だからだれよりも恐がって近づかない。私に会いに来るのもときどき、ふだんはなにをしてるの？」

かわいこちゃんの瞳を追いかけてもしかたがない。人々が行き交うラインに垂直にメスを入れる。地下にある噴水は銀色に染まる。そこにあつまる人たちがそれぞれに色を持ち寄るがかなわない。

色々な出来事に思いを馳せる。家に居ながらにして街の様子や店を思い描く。かつていった土地や状況季節を懐古する。ほんとうにあったことなのだろうか。あの辛い出来事もあの喜びも達成感も、今がありそれだけなんじゃないかと思う。時間は流れてはなく今だけがある。だから今、思い出せる。

感じていた。もうすぐだ。色は赤にオレンジなんだけどトンボがま

ばらに飛びものかなしい寒さ。秋の夕暮れ。そのときが来るまで生きられる。

「なにもしてない」
「こたえになっていない」
「何もしてないなんて」
「仕事している。前にもいったろ地図屋さ。帰って焼酎と晩飯。シャワー浴びて缶ビールあけて、寝る。朝、おきて飯食って仕事いく。その繰り返し」
「わかった。じゃあ休みの日は？」
「昼まで寝ている。起きてワインとつまみを買いに行く。店には30分くらいはいるかもしれない。どのワインを買うのか。前と同じなじみのワインを買うのか新しいのに挑戦するのか考える」
「最近わかってきたのはうまいワインは一カ所に集中するってこと」
「どんな品ぞろえがいい店でもうまいのがほんの一握りって店がある」
「反対に規模は小さくともどれもいい品ばかりの店がある」
「実はそのいい店にいけば思い通りのいい品てにはいるのわかってんだけど、全部飲み尽くしちゃって、これは自慢じゃないけどほとんどオレのために仕入れてるような銘柄がそこには間違いなくあって毎回買うんだよそいつをオレが店の人もわかったんだろうねそいつを。置いとけば月何ホンは確実に売れるってさ」
「間違いないね、おれが買うもの、置いとけばさ」
「それとはべつになんてゆうか、別物で新しいものを探して旅をしてるんだ最近」
「飽きたって訳じゃない。そいつの味は良く知ってる。自分の一番だ」
「それを超えるものを探している」
「かならづあるはずだから」
「それがまた楽しくもあり辛くもある」

「で、なじみに戻る」
「やっぱりこれがおいしいんだ」
「今度、飲ませるよ」
「それとしってた。白ワインはカップ麺にあうんだぜ」

彼女はちょっといつもとは違っていた。ぼくを図っていた。黙って聞いて最後に言った。
「ねえ」
「明日休みでしょ」
「一緒いきましょう」
「ん」
「ワイン買いに」
「昼からでいいから」
「起きてから、電話ちょうだい」

そういって、別れた。
最後のカップ麺のくだりが明日香の興をそいだだろうか。とにかく明日の用事ができた。ぼくは毎休みワインを買いに行ってるわけではない。あくまで大抵の話をしたまでだ。とにかく明日はワインを買いに行かなければならない。なになにしなければならない。英語の授業のようだ。たしか、はうとぅー　でもない　はぶ　だっけか。とにかくとかく現代の必須語のようによく使うが好きじゃないよくさけたい言葉だ。だが明日香のためになら明日つかってもいい。ぼくは思い眠りについた。

酔ってるわけではなかった。
ぼくの淡々とした行動。飄々とした言葉に明日香がきれた。
昨日の内からそうだったのだろう。あえてそれを今日にしたのだ。
作戦を一晩ねったのだ。それじゃあかなわない。

「晃はそうじゃなかった。晃は私にいっぱい話してくれた」
「晃はどこどこれもつれていってくれた、晃と何々のあつまりにいった」
「晃は前向きだった」

最後にあんたは何なのよっていいたいんだろう。でもいわなかった。我に返った。どっちがわれなのか。汗かいて髪振り乱して、瞳孔がひらくってこんなこというのだろう。ぼくはなにかいいかけたがわれにかえった明日香はわかってる。わかってる。滅茶苦茶だってわかってるといいたげでぼくになにも言われたくないようだった。さんざん言われ続けたとき何か話せばよかったのかしらない。ぼくはひさしぶりにみる命の輝きとやらを感じていた。真贋の判断なんて必要ない。疑いもない。ただ黙って浸っていた。

「あなたは閉じこもって出てこない」
「もっと教えてよ、もっと頼ってよ」

しまいにしょんぼりしてかわいかった。
かわいいよといおうとしてやめた。

ぼくはその両肩をつかみたかった。
ぼくは晃ではなかった。
わからなくても考えなくともいいことだった。

「ふたりで長い滑り台をすべるんだ。最後はプールに落ちるやつ。水上滑り台だっけ。それでお前はふつうに足出してケツついて頭うえにして滑るんだ。ただし俺を連れて。」
最後のところですこし反応した。
「おれはお前と滑るよ。お前は両足の足裏を八の字にしてくれ上に向かって末広がりさ。わかるだろ漢数字の八」

「それでオレの顔をそこにのせる。開いてるところを窓にして前方を見るんだ」
「それからお前の手がオレの足を持つ。ソレでいこう」
「よくない？」

はっ。なに。わかんない。って顔はしなかった。眉も潜めず、笑いもしなかったが、巷の週間ジャパニーズポップの６位ぐらいの勢いだった。

なにもかわらいない。街は滅ぶか興るか。人はそうじゃないっていいたい。生き死にだけじゃないって、でもそれは幻想か、ロマンチックだねぇっていわれる。街の言い分だってある。同族相哀れみ。

みな騙されてることを了承している。オレは認めない。
みんな気付けば絶対オレよりひっきーさ。おれよりやる気なしさ。
おれはすごいんだぜ明日香。この精神状態をものにしている。

ギンギラッてよりはフライパンの上のトマトピューレ。ぐらぐら、びちゃびちゃ燃えてんだ。そんな情熱、そんな輝き。

「今は時を廻すために生きてるよ」
言った後、寒かった。言葉は宇宙空間の間に吸い込まれた。ぼくは赤面した。汗が噴き出した。しかし冷静になって白状すればぼくになにができるのか。明日香を抱いて中だしして妊娠なんてまっぴらごめんだ。

「これからおレンチくるだろ」
「泣いてンのか」

「もう、いくぜ」

店を出た。風は涼しかった。ぼくの足が動かなかったら風になびくすすきとして一時間はすごせそうだった。

本当は慰めて欲しいんだ。でもぼくはそうせず、ぼくも慰めたかったのだがわざと慰めてもらった。

ぼくらを結びつけたのは晃で、容易にふたりになれなかった。三年前のエロ本と一昨日借りたエロビデオを片づけた。これらと簡単に一つになれるのにそれらを追いやった。

「あれから何年たったっけ」

「初めてあったときのこと覚えてる？」

主導権はぼくがにぎっていた。ぼくはだけれども男らしくなかった。男らしさとはあれこれいわず優しく愛情を持って彼女を抱くことのように思う。

ひとりでいるとき拳で布団に穴ほっていた。今日は違った。無理するな無理は続かない。瞬間のキラメキニ頼るな。

あなたが言う社会や世界や時間ってなんなの？ぼくはその問われないうちからの質問に対する答えをずっとひとりで探していた。

ぼくはらしさがなかった。ぼくは男だ。明日香は女だ。ぼくは時間をたっぷりつかった。

それが二人があってからいままでの時間であり、いまぼくがあけている間のようなものだ。二人の関係は晃を超えて始まるんだろう。

部屋は変わっていた。晃の欠片もない。

明日香を抱いたって答えがでやしない。でない。騙されやしない。

「そう思ってるのはあなただけじゃない。私も同じ事思ってるとしたらあなたどう？」

「あなたと寝たってなんにもならない、付き合ってもなんにもならない」

「あなたは私、私はあなた。あなた。自分を見捨てるの」

ぼくは弱虫で小心で震えていた。怖かった。決断するのもしないのも怖かった。避けていた回答にいっぺんに答えを求められていた。避けることがうまくやることだとそして実際うまくやってきたと思っていた。何にもならないそんなことは、今となっては。

白黒はっきりつけてくれと言われても白も黒も知らない。それでも答えをださなければならない。なになにしなければならない。しなければならない。英語の授業をさぼったぼくには答えがみつからない。くそ嫌いな言葉だ。

白を選んだとしても黒にしても結末が見えない。これが死か？ぼくは死に直面してるのか。どっちを選んでも死か。どうにかうまくやりたいと願ってきた。どっちにすればいいか見当もつかない。踏み切る勇気がない。

ぼくは初めて人に泣き言をいいそうになった。たすけて。と。か細い蚊の鳴くような声を出しそうだった。彼女を見た。彼女も助けを求めていた。

ぼくのお腹は肝心なとき鳴らなかった。携帯のワン切りもいたずら

のメールもこなかった。

で、ぼくと明日香は一つなのにふたつになった。
骨折り損のくたびれもうけ。空くじばっかりと思っていた。
違った。

この期に乗じてぼくは自分のことだけを考えていた。男らしさとは
男が女より強いと思いこむこと。女は弱いから守ってやらねばとき
めつけることだ。らしらを手に入れるチャンスだった。

ただ黙ってくたばるなんてまっぴらだ。
ぼくはまだ戦える。
けれども今日はもう駄目だ。
明日香のおけげで自分を手に入れた。

そして登場。
灰皿の上に潰した吸い殻が綺麗だった。

「おれ間違ってたよ」
「毎日は戦いでもなく仕事とでもない」
「毎日は自分だ」
「義務でも責任でもない」
「自分だ」
「自由でも情熱でもない」
「自分の思ったとおりの毎日」
「思い通りの人生」

知らないまにつかんでいた。毎日は人生は生活は自分だ。自己形成
すなわち人生設計。

こころ豊かな人間は豊かな人生。疑り深い人間は風に迷う白雲、小川の流木。
気づいたときにはできあがり。だれだって、豊かになりたい。幸せになりたい。

人生を複雑に考えればそうなる。だれでも思い通りの人生。
原因と結果を正しく理解する。原因と結果でできた簾をくぐる。

絶対手にはいんないものがアル。どうしても叶わないことがある。
その二つを明確にする。わすれない。そのためにてにいれるものを考える。その代わりに手に入れるんだ。
言葉では簡単だ。奇跡は起きない。。届かない夢。
届かねんならただ喰らいたい。シャブリ尽くしたい。叶わねんなら叫びたい。きちがいだとおもわれるくらい聞かせたい。

同じ味のキャンデイーじゃあきちまう。

アメリカ人がやってきて法も制度も作り替えた。ぐずぐずしてるからだと彼らは言った。
御国が嫌いな人はアメリカ人の味方をした。ぐずぐずなどせずにこれをチャンスと捉えた。何もかも嫌いな人とまあどうでもいいやという人はアメリカの技を盗み真似た。
やがて大企業が興りビルをたて小を喰らった。都市が地方に移転しては同じ事を繰り返した。なんにもしらない少女からたんまり純度抜群な蜂蜜を注いでもらい肥え太る。

A、始めにアメリカありき。と現代社会学の教科書にはそうかかれていて、著者は先生で、自分で書いたとのことだった。彼は自分の意見を言った。すべてがすべてではないが、授業に真摯に主観を挟んで展開した。普通の授業に自分の主観。二度手間ではないか。進

行が遅れる。いろいろな批判と個性的なものへのあきれが先生を取り巻いた。
ものをより楽しむならものをしらねばならない。取るに足りないものでもその時代背景や裏舞台をしればどんなものもテレビで行われているドラマになり得る。とは先生の持論だった。小さな県下のスポーツ大会も身内にとってはオリンピックにも匹敵する。
ソレを知ることだ。より深く。純粋に。先生は教育理論を酔っぱらうと語り出す。
彼の授業は好評を博した。

「真剣にいくところは真剣にいくんだ。突然のことに笑われるだろうがかまうな」
「周りに引かれても自分は引くな。自分だけは引くな」

なぜ時差があるのか社会の時間に説明し、数学の時間に言語の統一について語った。

先生はいった。

「自分が飼いごろされてるとかんじる人はチャンスだ」
「今いるそこには大事ななにかがたしかにあるんだ」
「だからセキュリティがほどこされている」
「大事なものをつかんでぬけだすんだ」

先生は続けた　　。

「悪いことでなくともそこにいる十人が十人とも同じ事をするのは悪いことだ」
「周りを見るって事はそんなことじゃない。周りを見て後れをとらないようにみなについていくんじゃなくて、なぜみなが同じ事をし

ているか疑問に思わなきゃ」

「超大作ってのは練り上げられ、時間と金がかかるから期待はずれなものが多いんだ」

「作り始めたとき最新でも完成までの時間の内にそれが古くなってしまう」

「金をかけただけ後に引けない」

「練り上げて手間暇かかって思い入れが強すぎて単純な批判を受け付けない」

「だから、気をつけないといけない」

「私精神的な人が好きなの」

会ったときそういわれた。

ぼくがそうだからそうなってほしいのか。職場に新しく入った新入りの彼女だった。

テレビによって言葉が氾濫し、普段テレビを見ていないぼくは今様の言葉に疎かった。

彼女は大学生でぼくを大学の授業に連れていき、先生の授業を受けさせた。ぼくはいつだって大抵のあたらしいのもには目がなかった。

「あれが君の思い人？」

仰向けに二人ならんで寝転がっていた。

風に開いた股ぐらを犯されていた。半分あいた窓から南風。

「南風ってのは南から北へ向かう風って知ってた？」

風はそれだけで動作の意味を持つ。

となりに股ぐらを閉じた明日香がいた。

風に色を付けたら南風は明日香の胸の上で小さな二重の虹をかけていた。

ぼくは起きあがれずに空を見ていた。ぼくの目はまどろみ鼻先から数メートルに空の最初があり動いている雲の裏の空が数十メートルほどにしか感じなかった。
明日香は目を閉じ鼻でゆっくり息をしていた。鼻穴を鼻孔と表現する気持ちが芽生えた。
目を覚ましてから数分たっていた。まだぼんやりしていた。唐辛子や胡椒。わずかなスパイスが本当に目を覚まさせるきっかけになる。とびっきりの唐辛子は仕事上のトラブルだが明日は休みで問題は想像つく範囲では休みの後にしかなかった。
ぼくは足の指をちらちらしてみた。素っ裸なからだで幸せを吸収していた。
明日香が目を覚ましているのはわかっていた。
腰の辺りをくすぐり膝を立て「M」といった。
「真ん中のこれはなに？」
ぼくはYにもどした。
じゃれついた。ヘッドロックをかけて埋めてしまいたいくらいかわいかった。
「裸の時女はあそこで呼吸をするのよ」
ぼくはだまされそうになった。

「そうなのかだから苦しいのか」
ぼくはそこをふさぎにかかった。

体調がよい。朝起きても夜寝てもだ。明日香との関係はいつまで持つのだろうか。ふたり自分を諦めるまでか。
考えることは悪いことだろうか。ぼくはこれ以上何を踏み出せばいいのか。なぜ明日があるのか。ぼくは今日満足だ。明日がそうとは限らない。今日の満足を売り物にして明日を買わせられているのか。
明日香の弁当を開く。聞いたことがある。弁当は今すぐ食べるため

につくるのではない。それを食べる時があり、その時のためにつくるんだ。弁当をつくるのは未来をつくること。創造の世界。
そして破壊。弁当箱がからにかえってくる。外国人が好きな表現なら禅。
また明日。さらにそのさきのために中身を詰める。空になることは創造主の喜び。
禅の世界。そんな言葉一つほしけりゃくれてやる。もってけどろぼう。
でもやつらはすごい。まちがいない。認めざるを得ない。なにか薬やってんじゃないかと思う。肥大した精神と肉体を腐らせながらチーズのように味わう。

「オレは真面目に生きてる人間を知っている。そいつらがそれゆえに必ず勝つとはいいきれない。負けそうでもあるし勝ちそうでもある。かれらこそかつべきであるのにそうではない」
そいつらが諦めないように、くじけないように祈る。
ぼくはけっこうというかかなり負けていて負けることに快楽を見いだしつつある。負けることに受け身になりつつ、勝利の女神に対して調教を施すことを諦めない。ぼくは勝利の女神にこびはうらない。
ぼくは勝利の女神の前で堂々とできる。勝利の女神に愛されたいと言うよりは愛したいたぐいの人間だ。
ぼくは女神を調教して彼らの上にもっていく。よりかつべきであろうやつがいるところへ。そして彼らが檻に入れたらそこから出してやる。女神に自由と束縛を。ぼくはたっぷり愛されてる分たっぷり愛してやるんだ。

ぼくは学食で週にAからCまでのランチを食うぐらい学校に通っていた。その学校の図書館で仕事をする時間が増えた。
たまに職場の新入り、藤村が友達を連れて見回りに来た。
「この人学生じゃないんだよー」

「でてけでてけー」
「えいえい」
ぼくはたまにおしやられ、たまに彼女らいきつけの食堂とかサテンだとか飲み屋に連れていかれた。男も女もいっけんすると馬鹿騒ぎだった。
しかしその裏のギャップは計り知れない。
ぼくはまあまあ真面目な仕事をしあからさまな手抜きをしなかったのでみなはじめはぼくの仕事に興味を持った。
彼らのほうこそぼくのなじみになった。
「すごーい」
「いつもこの缶コーヒーですね」
「仕事たいへんすか」
「こんど絶対お店いくから」

ぼくはなんだか自分がやりたい仕事をやっていると思われその生き方というか生活のリズムにかるい尊敬をうけはじめていた。
たしかにぼくは異種な仕事に就きぼんやりと生きていた。家賃がかからない分年収はバイト並。この都会の片隅にかろうじてひっかかってるだけだ。
たまに明日香と激しく動き頭の中を真空にできる。
ぼくみたいなのはその世代じゃ新鮮だ。その場所じゃ一度くらいはあこがれる。もどれるうちにみておくといい。先にしか進めなくなると大変だ。現状のラインをキープしてるうちはちょっとくらいはみだしても大丈夫さ。

ぼくは頭の中に地図をもってる。地図はまた広がりつつあった。頭の中の地図だから平面だけではなく奥行きも立体感もあった。風景を写真で切り取った連続でもあった。頭一つあればいい。それは自分でつくるもの。人から聞いたことを付け加えたりは容易にしない。

なんでそれが信じられるだろうか。おおげさにいえば命がけなのだ。この地図を頼りに生きてるんだ。間違えられないときがある。そんなときは勇気が必要だ。人の言うこと聞く勇気はぼくにはなく。自分を信じる勇気をもつ。引き返せないぼくとしては前に進むしかないのだ。進んで戻るしかないのだ。

コンピュターや機械が人間に近いんじゃなくて人間は機械だ。人間は一つのことも満足にできない出来損ないの機械。テレビだってビデオだって冷蔵庫だっておのおのの役割を忠実に果たす。ぼくは部屋にいて自分の周りの機械からさげすみの目を感じる。彼らにしてあげられるのは電池を替えたり、ほこりを払ったりするぐらいだ。

表現するより効果を求めちまう。結果を考える。ただ表現することを忘れるな。

明日香はぼくの視線を正面から受け止めてくれるように感じた。結婚してハルに最後の言葉についてインタビューされるのだろうか。ぼくの視線を受け止めるのは明日香で言葉を正面から受けてくれるのはハルだ。言葉は発する言葉を選べて複雑になってしまう。視線もそらせばいいっていわれる。あなたはなんにもみていないってハルにいわれる。明日香にはあなたの言っている言葉がわからないといわれる。

オレも明日香の使う言葉はちんぷんかんぷん。ハルもオレを見ていないんだろうと感じる。でもオレの視線は明日香にとどき、言葉はハルに通ずる。すべてがないのは残念だが満足だ。すべてなんても

ったら気がくるっちまう。いつまでも目を開けていられないし、いつまでも黙っているわけにもいかない。

ものの対価について語った。例えば今から物々交換になるとして。物と、感情や思想や意見とかも含みで、何と交換するか。あなたの何々が欲しいと言われ対価として何を要求するか。何に対して何を出すか。例えばタバコ買いに行って、何を置いてくるか。その人その人のセンスが問われる。理由しだいでは道の石っころでもいい。

自分に足りない物を叫んでいるんだ。叫び方はどうであれ。あいかわらず見も心もばらばらで、それでも見方によっては星座をつくる。人はなくなったら星になるなんて昔はよくいったもんだ。ばっちりだよその表現そのセンス。美しいです。

だんだんと眠ることが癒しではなくなっていった。もう見たくないと思っていた。もう言葉も発しないと思っていた。ぼくはみるものとはっする言葉と相手を得た。頑張ればできるとか信じれば夢叶う。とか、おれら大人はとんでもないロマンチックでそれを子供に教えてる。それはやめたほうがいいんじゃないかとおもう。ぼくもロマンチックな迷信にずいぶん悩まされた口だ。ぼくはありとあらゆるぼくができる範囲での手をうっていた。こうして感慨に浸っている間にも手を打ち、生きている限りはそれが終わりなきものだとしる。それぞれの手は打った。順には返ってこない。まったく変則でぼくはそれで千手観音様を信じる。死に至る病だ人生は。ならなぜこんなにも精一杯生きるのか？おれ？先のことから目を背けているのか。この世にない物を追っている。みな、がつがつ毎日を喰らっていた。ぼくは肩をたたいてそれだけで静かに相手をつぎつぎと殺したかった。ひとが次々に死んで発展すればいいと思った。人は生き続け発展と繁栄に貢献しているとでも思っているのだろうか。ちがう。い

まや人が死ぬことが発展への道だ。ビルを道路を車を人をつくらないことが発展だ。

強くなることには憧れるけど失う物もある。夢作れない国、つくらせない制度、叶えられない国民。そう呼ばれるものすべて。だれか力を握ってるやつがいるはずだ。そいつを殺せばいいのか？ちがう。真似したいのか？。ちがう。じゃあなに、ほっとけばいいじゃないか。それも違う。

おれの大事な何かがその権力者に踏みにじられている気がする。だから行ってケンカ売る。人はやっぱり勝ちたいから勝っている。負けたいから負けている。

殺される相手を決めるために生きているんだ。この街に殺されるのか。家族に看取られるか。仕事一筋に生きるか。誰に殺して貰いたいか考えろ。

珈琲を挽く快感を手に入れた。

なにか主張がなければ服をきちゃいけないのか。ファッション業界の厳しさはある意味のすくいだ。しかし街歩く貴人達すんげーがちがちに固めてやがる。オレなんてふわふわのふーさ。

ぽろぽろと落ちるやぎのふんを数拾い上げる。

才能のあるやつは一筋の線に見えるんだろうな、点を千個集めなければ。

一つの嘘でよいところが千かかる。

目を閉じて目を開ける。千をとれ、できるならば万を。目に前に広がる景色がどんなものでも千の意識をとれ。

適齢というものがアルなら恥ずかしいよ、生きているのが、こんな意識で。街になんてでたくない。人に会うと恥ずかしい。

うそ。いや、ほんと。

求めよさすれば与えられる。吠えない犬はもらいが少ない。ぼくは犬ではなかったが吠え、得た。そうやってとりこんじまうんだ。自分を殺しにきたものを。不満を解消させてやるんだ。力あるやつはいつも安泰さ。

自分の頭蓋骨の額の部分を内側からおしてやる。
半端もん。平凡、凡才。どれだけ才能あるやつに負けてきたと思ってる。どれだけ弱きものに情をかけてきたとおもってる。気づけば勝ちもできない負けもしない。

意志の入り込む隙もない。合縁奇縁。
自分の今ある餌場から離れられない。自分のやり方にこだわって抜け出せない。

人の心こそ完璧なる円周率。ぱいだなんてあってたまるか、スーパーコンピユーター何千台だってとけやしない。とけたらいよいよそれこそオレの負けだ。ホントの降参してやるよ。

で、まだやれた。間違いなかった。

明日香は金貯めていた。パソコン買うためでも海外旅行に行くためでもなかった。ぼくはいつまでもぐじぐじしていた。毎日が責任の積み重ねでいったいぼくは答えを求められていた。甘やかしはしない明日香だった。ぼくは果たしてオナニーができるか確かめた。まだできた。答えを出さないことと出せないことは違ったが二人の関

係の効果としては同じだった。ぼくは時間をかけると言うことの前科もので、一日で使える貯金を三年廻した男だった。四年目の展望も新しい貯金もなかった。ぼくはひとりで生きていくことはできるが何も作れないのだろう。答えなんぞ気にしなけりゃださなくともよかった。明日香も聞きたくはないだろう。答えをだしとときの八割は悪い方の答えだってわかってる。

「あなたは歳をとらなくていいわ」

「ん、どういうこと」

「あなたはいつまでもわかいまま」

「オレの脈はかってみ」

「ないだろ、どこにも」

「心臓も、ほら、どくんどくんいってない」

「死んでんだ」

刻々と時は流れていった。ぼくの心臓の音はどうしても聞こえなかった。

「そんなわけないじゃん」

そういわれるが中開いて見てみたいもんだ。ぼくの心臓は中南米の古代の儀式用になったんだ。太陽にお供えされてないんだ。代わりにわらかなんかがまるまってはいってんだ。

「肉が厚くて聞こえないだけ」

ぼくは明日香の心臓に耳つけるが唇でも聞こえそうだ。生きてんだろう明日香は当たり前だ。

「そんなわけねえ」

「そうよ」

「おかしなことばっかり、いわないで」

ぼくは真面目に踏み込むのが怖かった。これ以上真面目になんて何

がおかしくてそうするんだ。
あなたはなにもできないじゃない。
そういわれるのが怖かった。

できないんじゃない。できてないんだ。
答えを出すなら早くして。女はやりなおしがきかないの。
だから次から次に手をうっとくんだ。
そう、こうなってもいいように、ああいわれたらこういう。ってね。
でも、しゃべり終わった後黙って明日香をみるのは好きだ。全部言い尽くしてぜいぜいやっている明日香を可愛いと思う。それをいうとおこられたから今日はやめておこう。

テクニックにたよりすぎるのはあれだが力でねじ伏せられない。技のデパートと言われるがデパートのイメージにも質にもよる。

先輩ともいわれる。
「先輩、先輩のメチャメチャにつきあってられるのは明日香さんだけですよ」
と藤村はいい。
「わたしは決めてるの。結婚はしない。子供は欲しいかも、旦那はいらない」
とハルは言う。

とにかくその日神様はいるならぼくの心臓のどきどきを聞いたはずだ。聞いてないで神様がいるとしたら神はぼくだった。その日、ぼくは明日香にプロポーズした。英語の辞書は部屋でひらかれっぱな

しだった。ぼくは太平洋を渡って夕方には西海岸に着いた。
ハルには最後の言葉のカタログを送った。

くそ、ハル。お前が嫌いだ。なんていってもあらっ今頃気づいたのねんねちゃんなんて顔されるだろう。ハルとの日々は鏡を見ているみたいだ。実際に在ったことかどうかなんて会ってる内しかわからない。

ハルと視線を合わせる。いつもと変わりない。

自分の言葉を信じるってやつにホントは言えない。

ギリだ。ぎり。ぎりぎりのギリ。魔王ギリに勇者ニケ。
生きると思って生きないと死んでるも同じ。

街に出て一時間、一年ぶりのパチンコ屋で投資５００円で差し引き四万勝ち。雨降りは好きで昔なじみにばったり会う。会話にならない会話をし信じられない偶然はあるもんだと偶然を思い傘をくるくる廻す。歌い手は歌い、行き交う人は行き交う。廻る傘はぼくでぼくも行き交う。午後もだいぶ過ぎいすに腰掛け人の流れに背を向けていた。
長い回廊、隣の女子高生はスカートの長さを気にしくるくる踊る。健康になったもんだ。携帯の画面に目をやりボタンを連打。タバコの代わりに男ども。
女子高生は去り取り残されるのは怖いって気づく。

あのスーツはは警官の張り込み、あの団体は学校関係の見回り、あれは呼び込み。引っかかるもんか、女子高生だってあなどれない。
餌と罠。
次はブランドの袋さげてあるく女の子だが、ナンパなんてしてほし

くないさ。家路を急いでいるってのに誰にも見られたくない姿だ。
そいつを着ているときにして、きれいに振っちゃうから。ぼくは数分言葉を抑えぼやっと暇人こいて誰かいないかと見渡す。
いづらくはない。あてがないのがなにわるいもんか。ぶち込まれるもんか。絶対うまくやってやる。

場を変えてもう一度やっても同じだ。最初で決めないと、この顔にぴんときたらいっまおう。世界は一つきみとぼく。最初こそが絶妙のタイミング。流れに乗り進め。

わかってるさ。街歩いてもいくとこねえ。見るもんねえ。だからといって金に逃げるわけでもねえ。みんな夜までひっこんでンだ。年寄りがねむっちまうまで。いかしたヒップホップの外人さんも駅前のロッテリアで携帯ひらいていじけてたよ。どいつもこいつもポケットからだしてはいじってる。
悲劇なんて人の話で腹一杯。
うまくやるとか以前に自分で考えて動かないと大変なことになる。

「なにか欲しい物とか行きたいとことかしたいことでもあんの？」
ぼくは家出ついでに泊まったホテルにデリバリーのヘルスを呼んでそう聞いていた。
「んー。なんにもない」
だからといってぼくもそうだ。
オレも同じ事考えた。
「オレもねえなあ」
「だけどさ、とりあえず目の前のあなたは可愛いしだからおれはそれで満足だよ」
そういった。
浅い男と思われてもそれがどうした。ぼくは思ったことを口にした。
新鮮な自分を感じた。

ことが終わってシャワー浴びてベットに入る。猫のように人なつっこくマキはベットの隣に飛び込んでくる。
かわいい。仕草てきには猫をイメージさせる時点でぼくに対しての勝ちだ。
未来は無限の可能性っていうだろう。本当さ。ぼくは未来を会社に売ってンだ。十とか二十とかの大安売りで。それを千とか万とかにできないか考える。

愛とは迷い、恐れ。そのたもろもろの感情が行き交ってる状態。
リズムや決めごとをつくるのは大事だ。決めごとがリズムをつくる。
一度つくられたリズムはなかなか壊れない。だから編曲も可能。

そうさ。オレもなんでもいい。この世界とか自分の将来とかなんだかわからない。でもよ、目の前の女が本番以外なら何してもいいよっていうんならそれで満足する。
ものは極上のもんは簡単には手に入らないってことさ。
ひとりなら一本のマッチでひとり分、ふたりなら二人分のタバコが吸える。
「すごいね」
ぼくはそういいタバコを吹かす。
なにがあった。これまでなにがあったんだ。
忘れてしまった。これまで何を大事にしてきたのだろう。
何でぷっつんあきらめなければならないのか。
暗闇の呼吸。光はそこに届いているから光。

みんな後から付け足すのさ。生きてる価値とか意味とか。
何もかも捨ててしまいたいよ。
時がたてば全部ゴミだ。捨てるのに苦労するごみだ。

何もかにも忘れちまった。だれか覚えといて。

もおオナニーなんかしたくない。

今をごまかしちゃいけない。今はこれしかできない。

何かに夢中になりたいんだ。ゲームだろうが何だろうと。仕事だけじゃねえってことみせないとな。

だから夢みせるために生きてるのか。暇だもな、やりきれないもんな。一瞬でも一時でも極上の夢みたいものさ。そして覚めないようにって言うけど、そこはそうじゃなくて次の夢への手がかりを得られればいい。

仕事仕事ってどれだけのことをしてるっていうのか、時間をもてあましてんだ。不満があるならそいつの味方をするな。いいたいことをいってみろ。あの子とやりたいなら声かけろ。ありとあらゆることを試してわかってからだ。それからだ。

なけりゃつくらないといけない。つくれなきゃとらないといけない。

負けたら泣く。

やっと十月に追いついた。そのときもう四日だよ。

寝る前の目薬。

生き延びてやる。

ぼくは誰もいない静かなところにいる。ここは時が止まったようだ。ここに彼女といられたらと思う。しかし神は許さないんだろう。ぼくは騒々しさと騒がしさがどうちがうか判断できる知性を持ってそれらが溢れ分類しれくれといわんばかりのところにむかわなければならないことに意を唱えなかった。

「先輩ってちょーよゆーですよね」

「だからそんな暇なこと考える」
「仕事終わって家帰って酒飲んで寝りゃあ朝で給料日までがんばってんのが普通」
「でもかわいー。ちょーキュート。わたしがおしえてあげよっか？」
ぼくは心を殺すのが得意だった。精密機械のような仕事をした。いや、失敬。最近考えを改めた。精密機械は誰よりわかりやすい心がある。一点集中。宝石として光り集める。ぼくには間違いなくその力があった。藤村はその横顔を見ていた。

「おれが朝、にやついてたの見てたろ」
「昨晩、思いがけず、いい女と、いいことをした」
「で、おかしくてさ」
宝石が半分溶けた顔をした。
かみ合わなかった。でも、想像で何度か犯しかけた。

あいつも終わった。兄弟揃って駄目だった。この社会をつくったやつは天才だ。まったく揺るぎない仕組み。膨大な積み重ね。どこかにある弱点、私自身。
人混みにまみれパニックをおこし簡単なところで手を打つ。自分を失わなかったやつはそれで精一杯。自分を凡百の存在と自覚して超えようとせず。

みんながみんな同じだけのことをして同じだけのものをえられたらいいのにね。
全部運とか月だけできまってんじゃないかとおもうよ。何をつかむって？そりゃあ、運も月もねえ男が運も月もある親に努力しろなん

ていわれることが腹たつよ。努力しても
なんにもなんねえです。運も月もありません。運は地深く月は届かぬ空の上。生まれてすみませんだよ。地を灰色に覆い空に届かないところに浮いている。そりゃあ口なんてききたくねえよ。自分より物を持っているやつ、ゆるせねえ。あんたらの唯一の不運と不幸はぼくです。なんていってたまるか。あー憎々しい。努力や苦労が報われるのを普通の運があるとかついているというんだよ。なんにもねえやつもいるのさ。そのうち、努力も苦労も感じなくなる。報いってなにさ？
半端で適当やっていけるやつは強運の持ち主。頑張って真面目にやって報われる人生は普通の運勢。手を抜けばぬいたなり落ちるとこまでおち、真面目にやっても真面目にやったとおりにしか返ってこない。それってひどくねー。オレは適当も真面目もしんじねー。強運を羨むし。報われる喜びを憎む。ただ運があるかないか、ついてるかついていないか、これが世界でぼくはその外にいる。だから、だれよりも夢をみるが夢見れない。反対にあっちは夢にないくせに夢を見る。おれの夢はあいつらに食われていて、あいつらの現実をオレが食わされている。夢つくる側と叶える側。だねだってわかるために何度もやるよ。だって一日一歩づつ百日かけて駄目になるより、一日百歩歩いて結果しりたいじゃん。あとの９９日は浮くしね。

みな自分を持ってるというよりプチな時代を背負ってる。わたしはなにも人の幸せや不幸を眺めているだけじゃない。わたしが幸せになりたいのだ。人なんてどうでもいい。ただ私のしあわせの障害になってるのが人だ。滑らかなプラスチックのファンシーな黄緑色のポット。一度も使われづに廃棄処分。こんな物にまで名前を付ける。早いものがちだ。最初に恥かいたもの勝ち。こんなものにまで自分のブランドを確立させようとする。なんでもやりたいんだ。自分の部屋には絶対こんなのありはしない。ローマ字で書いてるからそれ

なりに見える。

階段の一段を高くしちゃあいけない。一段が千段分だなんて千段はのぼれても一段がのぼれない。なんにも確信がもてない。死ぬことが確信だ。死とはなにか？まだ体験したことのない確信。間違いないこと、オレらは死ぬんだ。そのことがわかっているから死、が見えてこない。

猫が二匹ずつ組になって４匹。二匹同士がケンカする。黒、白、灰、白に片目のところにピンクの斑。

ただそこにすべてがあるということへの自信。一時間は持つ。うまくやれば３０分。その後の沈黙なんておてのもの。別れかキスかセックスか？

恐竜が全盛の時代がかつてあったらしいと聞いた。人間の祖先もそのころからいていまのわれわれにいたる。巨大化しすぎたのが恐竜絶滅の要因の一つと聞いた。人間も体のサイズは大きくは変わっていないけれども他のところが巨大化している。人ひとりが時に暴れ狂う象のように生きていることを主張して走る。

「先輩飲み会行きませんか」

「人数いなくて」

「三三なんすよ」

「男の方の三分の一」

明日の為に食事をとるのと昨日の消耗を補うための食事。今を楽しむための食事。

知ってもらうためには言葉を尽くさなければならないが、その尽くした言葉のなかにたまたま絶世の美男子がいて話をまぎらわす。そ

れは話を自分にとってわかりやすくすることであったりつごうよく理解しようとすることである。

ここはどこ

「正直この世は地獄だ」
「私といるときはそんなことといわないで」
同じ場が今日は天国で今日は地獄になる。
「なんでだ」
「あなたがそれを望んでいる」
「あなたは毎日が天国であることに耐えられない人。だからあなたは地獄をつくる。自分でつくる。そして地獄を抜け出して天国にくる」
今日の暗闇はやけに深く濃い。ぼくの顔の右半分がとかされる。

隙間から徐々に埋めていく秋の寒さ。

明日はだれにでもある。

政治なんて嘘さ。なんで政治家がオレらのことなんか考えているもんか。やつらはできることの十分の一もしない。

蛍光灯が目玉に見える。垂れ下がったスイッチは涙。そいつと引くと明かりがつく。

やりたいことやるのさ。犯罪行為はだめだけど。やりたいことをやるのさ。
いっちゃえよ。やりたいことをさ。なりたいものをよ。それが恥ずかしくなるくらい。

だとか。だとか。さ。

この世界つくんのもうやめねえか。くそ、だとわかってやってんじゃん、それをやめねえか。親の世代が叶えた夢さ。覚めること。先代の夢には浸れない。

これまで、なにがあったんだ。なにもない。これからも、このままいけばそうだ。

ただあちこち痛い。

未来などない。そんなこというオレはうそつきだ。

くたばるために働いたり、仲悪くなるために一緒にいたりする。

どんないい格好しても自分がぼろの外套着ているのがみえるよ。そうなりたいのかもな本当は。ただ自分だけじゃなくみなを道連れにしたいんだ。だからやってのける。人よりうまくさらっとさ、スマートにみせるんだ。そうすりゃやつらはオレの愛する外套以下さ。

夜のある程度ふけるとこのときを境にホントに寒くなっていく瞬間がある、十一時四十分だった。十月十四日だった。日の出や夕暮れ。干潮、満潮。朔に満月。時を表すのに夜の寒さ深まる時間が乗ってない。夏の間なんかはこの時は重宝するのに残念だ。夏は涼しいといい冬は寒いという。寝付きがよくなる。

時間を待っている。朝までの時間。休憩時間。仕事が終わって家に帰れる時間。寝るまでの時間。テレビ番組の時間。そしてもちろん

死ぬまでの時間。

本能と理性の戦いの時代。

何もつかめないならせめてやりたいことやるさ。明日世界が終わっても悔いがないかもな。賭けているものはないし。自分のできる範囲ではできるだけ尽くしたつもりさ。そうだなもう二週間待とう。最後のやつがあった。あれについちゃあまだ見込みがある。二週間の見込みだ。

金があれば何でもできる。ぼくはもうひとつよけいなことを知っている。金がなくとも何でもできる。

夏美を思いだした。あれから会っていない。死んではいないようだが。会ってない。連絡もない。それは死んだことと同じではないのか。生きてればいつか会えるなんてまったくどっかのつくりごと言葉。

昔工事現場で見た、オレンジのネオン。真っ黒な空から白い雪。道路に仰向けにひっくり返って口を開けてさらに鼻でも息吸った。あれはこれまでの人生でのベストショット。夏美にもみせたかった。いまさらいっても始まらない。何があったか？憶えているかぎりのすべてがあった。記憶がいったい何分何十秒持つってんだ。映画になるのか。正確な記憶は。長時間の記憶は。何十年といきてきて記憶をひっくりかえせっていわれたってせいぜい何分、よって何時間にしかならないんじゃないか。それが過去なら未来もその程度。今なんてあっという間の間もない。走馬燈つくるために生きてんじゃねえか。夏美。違うか。

あれはどこいったんだ。信じれなかったオレらの負けか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5706c/

東京天使

2010年10月21日23時33分発行